
オレとアイツの人形劇

しゃおろん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレとアイツの人形劇

【Nコード】

N0909K

【作者名】

しゃおろん

【あらすじ】

主人公は普通だった黒髪黒目の日本人。

ある日、突然クラスメイトの伊藤君と勇者として異世界に召喚され、勇者として頑張るお話。と見せかけて、勇者の扱いを受けるのはクラスメイトの伊藤君のみ。

しかも、召喚されて1日も経たないうちに空気のような存在になる主人公。

魔王の討伐に伊藤君たちと向かうが、伊藤君たちにはいいように扱われ、ギルドの依頼で稼いだお金を伊藤君たちに持っていかれ・・・。

いきなり召喚して魔王を倒せだなんて無茶言っなよ・・・。

注意

作者は初めて小説を書きます。

おそらく文章や表現が下手、おもしろくないなどいろいろあると思いますが、生暖かい目で見てください。

最初は日記形式で進んでいきます。

そして主人公最強ものになるかもです。

現在更新停止中。

記録1（前書き）

注意

作者は始めて小説を書きます。

おそらく文章や表現が下手、おもしろくないなどいろいろあると思いますが、

生暖かい目で見てください。

最初は日記形式で進んでいきます。

記録1

【日付 異世界2日目】

今日から自分を整理するために記録をつけようと思う。
先に昨日のことを書いておこうと思う。

(1日目)

昨日何故だかわからないが、朝起きると隣にクラスメイトの伊藤君が隣で寝ていた。

そればかりか場所がおかしかった。

そこはまるで生け贄の祭壇みたいな場所だった。

それからいろいろあって巫女さんっぽい人に召喚されたこと、魔法があること、魔王を倒してほしいこと、などを聞いた。

とりあえず昨日は魔力と魔法の適正を見てもらった。

結果は俺の魔力は3万、属性の適正は水と闇。

ちなみに伊藤君の魔力は21万、属性の適正は火、水、土、風、光の闇以外全部だ。

普通の魔法使いの魔力の平均は5000程で、

魔法使いの部隊の隊長クラスになるとだいたい40000〜50000くらいらしい。

適正は普通、火、水、土、風などの基本4種と光、闇の上位2種の中のどれか1つになるらしい。

この辺はまた今度別にまとめておこうと思う。

普通よりは大きいのだが、伊藤君と自分の差に全俺が泣いた。

魔力などの検査は王様や大臣、軍関係の人の前でやったのだが、

伊藤君の結果を見てすごく驚いていた。
そのあと俺の結果を見て少し残念な顔をした。
とりあえず伊藤君が勇者のような扱いを受けていた。
伊藤君は元の世界では良くも悪くも普通で、
容姿は日本人そのもので身長が少し高いくらい、運動神経も勉強も
だいたい中間ぐらいだったと思う。
まあ俺も同じようなものだけだ。

検査が終わったあとは伊藤君は巫女さんに、俺は兵士に部屋まで案内してもらった。

そのあと疲れから昨日はすぐに寝た。

(2日目)

朝、昨日案内してくれた兵士が起こしに来てくれた。
運んできてもらった朝ごはんをさっさと食べて、兵士についていった。

部屋の前につくと兵士はさっさとどっかに行ってしまった。

着いた部屋には伊藤君と昨日の巫女さん、あと知らない人が3人居た。

赤く短い髪の活発そうな女の子、緑色の長い髪でおっとりした感じの女性。

金髪でツインテールの少女。

ちなみに巫女さんは黒髪で長髪だ。

長い机の奥に伊藤君と巫女さんが並んで座っていて、左側の伊藤君に近いほうに金髪の子。

右側の巫女さんに近いほうに緑色の髪の女性。そしてその隣に赤髪の子が座っていた。

結局自己紹介もされぬまま会議は進み、30日間で伊藤君を鍛えてその後旅立つらしいことが決まった。

おそらくここにいるメンバーで魔王の討伐に行くのだろう。
その間俺は端っこのほうで空気のようにずっと立ったままで居た。

会議が終わったあとこのまま魔王討伐に行くと死にそうなので、
魔法をおぼえることにした。

しかし誰に教えてもらえばいいかわからなかったので、図書館に魔法の本を

探しに行った。

「わかりすぎる魔法の本」のシリーズ（基本の初級、中級、上級と
応用の初級、中級、上級）

の全6冊と「みんなで知ろう魔法の作り方」の上下巻の2冊、合計
8冊を借りた。

どこの世界の参考書もこんな感じなのだろうか？

昼ごろから部屋で魔法の勉強をした。

基本の初級を読むと、魔法を発動するには方法がいくつかあることが分かった。

その方法は以下の通りだ。

・自分の心の中で魔法陣を描き、それに魔力を通して発動

・紙などに魔法陣を描いて、それに魔力を通して発動

（1つの魔法陣ごとに一回しか使えない）

・杖などを用い空中または地面などに魔法陣を描き、それに魔力を通して発動

（特殊な杖が必要）

以上の3つが基本の発動方法だ。

上から順番にセルフモーション、ペーパーモーション、スティック

モーシオン

と呼ぶらしい。結構そのままだ。

それ以外にトークモーシオン、スクエアモーシオンなど複数人で発動するものがある。

やるうと思えば一人でできる人も居るらしいが・・・。

トークとスクエアについても別にまとめておこう。

魔法を発動するまでに自分の魔力を感じなければいけない。

うまい人で10日ほどかかる。と書いてあったのですこし絶望を感じたが、

才能があるのか2時間ほどで感じられた。

そのあと早速魔法を発動させようと思い、セルフで試したのだがうまくいかなかった。

そのまま夜まで魔法を試していた。

結局お昼ごはんはもらえなかった。

魔法の練習をやめて本を読んでいたら兵士が夜ご飯を持ってきてくれた。

ペーパーも試したかったのでそのことを伝え、紙を持ってきてくれるか頼むとすぐに持って来てくれた。

書くものを頼むのを忘れていたが、その兵士はペンとインクも一緒に持って来てくれた。

何時までも兵士と呼んでいるのもあれなので名前を聞いた。

名前はエリックというらしく、軍に入ってまだ1年も経っていないらしい。

そのあといろいろ話をした。内容は俺の世話を頼まれたとか、俺の居た世界の事、この世界の事などの話をした。

どうやら伊藤君の世話はある巫女さん（エイミィさん）がしているらしい。

この大陸には3つの大国と6つの小国に分かれていて、その全ての

国がここ30年ほど魔物に悩まされているらしい。

魔王が復活したのではないかという噂が広がり、魔王を見たというものも出だしたという。

そしてとうとうこの国が動き出し、過去に勇者を召喚したという魔法陣を使って俺たちを召喚したということだ。

とりあえず魔王を見たやつらはよく帰ってこれたな。魔王云々は少し胡散臭い。

エリックが出て行ったあとしばらく魔法の練習をした。ペーパーで試していると5枚目で発動できた。

初めて魔法が発動した時の感動はすごかった。この感動を忘れずに日々努力を積み重ねようと思う。

水の特徴は補助や治癒で、闇の特徴は破壊や侵食なので、とりあえずしばらくは身を守るために水を練習しようと思う。

記録2

【日付 新暦305年 5月4日 異世界10日目】

あれから特に目立ったことがなかったが、唯一気になることがあった。

そう、伊藤君のことだ。

今日この前図書館から借りた本、「わかりすぎる魔法の本」のシリーズをだいたい習得したので、

新しい参考書を借りに行った時のことだ。

訓練場の近くを通った時いつもより違う騒がしさだったので、少し覗いてみた。

そこにいたのは伊藤君パーティーと兵士たちだ。

おそらく伊藤君の訓練だろう。そこはいいのだ。何故自分は一人で訓練しているのにあいつは

などいろいろ思うところはあるのだがいいのだ。それは我慢できる1つ。たった1つだけ思った。何故小説のような展開で同じ様に召喚されたのにこうも違うのかと。

あいつは、伊藤君は

ハーレムを作っていた。

俺にはエリックしかいない……。

まあエリックが悪いわけではないが、俺もどうせなら女の子に囲まれない。

ハーレムを作りたい。

これは言っても仕方ないので諦める事にしよう。

俺は主人公ではないのだ。主人公は伊藤君であって俺ではないのだ。

俺は脇役。それも出番のない脇役……。

とにかく死なないように魔法の練習だけはしておこう。

いい機会なので現在やっていることや出来る魔法を書いておく。

基本、魔法はペーパーで練習している。

スティックはまず杖がないし、セルフはできないのでペーパーしかできないのだ。

戦闘となるとペーパーは効率が悪い。まず戦闘中は種類が多すぎると探すのに手間がかかる。

スティックは一見時間がかかるように思えるが、自動高速筆記の機能がついた杖があるらしい。

スティックの欠点は少し時間がかかることだろう。
セルフは媒体が要らないので発動が一番速い。

セルフの欠点は集中が他よりも多く必要なことだが、なればそうでもないらしい。

その点ペーパーは発動に少し時間がかかり、書くときには魔力が必要。

そして紙に宿っている魔力が一定以下になると使えなくなるため、迂闊に作り置きが出来ない。

そのかわり少し威力や効果は大きくなるが、欠点が多すぎて補いきれてない。

文句を言っただけでもどうしようもないので、杖が手に入るかセルフが出来るまではペーパーで練習をしようと思っている。

以下が出来る魔法のまとめだ。

・水を集める

・解毒（エリックに持ってきてもらった腹下しの草にしか使っていない。）

- ・ 治癒（切り傷程度しか試していない。）
- ・ 身体能力の強化（そこそこ使えた。一般兵士との魔法なしの模擬戦で勝つ程度）
- ・ 水の盾（水で盾を作る。大きさは込めた魔力で変る。）
- ・ 水の槍（水で槍を作り射出する。大きさは込めた魔力で変る。）
- ・ 氷の槍（氷で槍を作り射出する。水の槍の氷版。）
- ・ 氷の鎖（相手を凍らす。現在は足を凍らす程度。）

最近では攻撃用の魔法も練習を始めたので、近くの森をエリックに紹介してもらい、そこで練習している。
召喚されてからほとんどエリックとしか喋っていないので、そろそろ新しい友達がほしい。
しばらくは新しい魔法の作成が出来るように勉強しようと思う。

【日付 新暦305年 5月13日 異世界14日目】

今日の昼ごろ伊藤君に会った。
俺は図書館に行く途中で、伊藤君は訓練が終わって帰るところのようだった。

伊藤君の後ろには伊藤君パーティー兼ハーレム要員の4人が居て、不思議そうに俺と伊藤君を見ていた。
おそらく俺のことは忘れていたのだろう。

そのときをあらわすところだ。

「おつ。安部じゃないか！久しぶりだな。てか、まだここに居たんだなww」

俺に声をかける珍しい人は伊藤君だった。
少し伊藤君の言い方にイラツときたが顔には出さずに挨拶をする。

「ああ。伊藤君か。久しぶりだね。」

挨拶だけして去ろうとすると伊藤君は俺に喋りかけてきた。
おそらく伊藤君もさびしいのだろう。
元の世界の繋がりをみたいなのは俺くらいだしな。
本当はもう行きたいけど、もう少し付き合おう。

「魔法のほうはどうだ？俺は闇以外全部使えるからちよつと覚えるのに時間がかかったぜ。」

まあ、こつちに来てから1週間で全種類の槍ぐらいは使えるようになったけどなww」

ただの自慢だったorz

何だよ繋がりがって……。

自分が恥ずかしいよ。

俺は槍だけなら2日目には出来てたよ伊藤君……。

ここで真実を言うのもあれなので、少し嫌味を含みつつ適当に答えておこう。

「伊藤君はすごいね。まるで前の世界とは大違いだ。俺のほうはまだまだって感じかな。」

精々君の足手まといにならないようにがんばるとするよ。」

「そうか。ま、がんばれ。んじゃ俺は忙しいから行くとするわ。わりい待たせたな、行くぞ4人も。」

そう言つて伊藤君が去つたあと俺にすごい敗北感が襲つてきた。嫌味がまったく聞いていねえ。それどころかプラスにしてやがる。てか、伊藤君性格変りすぎ……。前までは「やあ安部君。調子はどう？」見たいな普通な感じだったのに。

大きな力は人をここまで狂わすのか……。

まあこんな感じだった。

これから心の中だけは伊藤と呼び捨てにすることにしよう。

【日付 新暦305年 5月19日 異世界20日目】

今日はエリックの勧めでギルドに登録をしに行った。

旅に出た時、個人で使うお金や旅立つ前に装備を揃える為や実戦経験の為だそうだ。

どうやらエリックは前々から考えていたらしい。

本当にエリックはいいやつだ。この世界で唯一の友達だしな。ついでに伊藤は友達ではない。

エリックに場所を聞いてギルドに行ったあとすぐに登録をした。

ギルドはランク制で、上から順番にS、A、B、C、D、E、F、Gらしい。

エリックからもらつた封筒を見せるとランクがDからの開始になった。

普通初めて登録する時はGかFになるらしい。

おそらく封筒の中身は推薦状か何かだったのだろう。

本当にエリックはいいやつだ。

そのまま帰るのも微妙な感じだったので早速依頼を受けた。

依頼内容は近くの森の魔ウサギ10匹の討伐にした。

狩った数はギルドカードに自動的に載せられていくらしい。

魔ウサギは角の付いたウサギだった。とりあえず10匹を狩って一箇所に死骸を集めて町に戻った。

(死骸はギルドの掃除屋が片付けてくれるらしい。)
ちなみにすごく弱かった。

魔ウサギが現れた！

水の槍。ザシユツ

魔ウサギを倒した！

の繰り返しだった。一匹ガッツのあるやつがいたけど……。目をむいてこっちに突撃してきたからね。水の槍刺さってるのに。とりあえずすげえ怖かった。

記録3 (前書き)

昨日友人のF君が家に来たのですが、作者の部屋に入った瞬間「おつとこと女で二人きり」くーらい部屋でナニをするー」と歌いだしました。

Fよお前は一体何が目的で俺の部屋に来たんだ。

Fの思考回路が全く理解できません。

記録3

【日付 新暦305年 5月29日 異世界30日目】

明日、魔王討伐のメンバーが旅立つらしい。

最近あまりにも連絡がなかったので、ひよっとしたら行かなくてもいいのか？

という淡い幻想を抱いていたのだが、まったくそんなことはなかった。

今日の朝エリック経由で連絡が来た。

明日の朝7時に城門に集合らしい。

とりあえずここ最近の出来事を書いておこうと思う。

あれから魔法の勉強をしつつ、ギルドで依頼を受けて実践をこなしていた。

正直結構強くなったほうだと思う。

依頼を結構こなしていたら、いつの間にかギルドランクがCになっていた。

そのおかげでここら辺に出る魔物はだいたい楽に倒せるようになった。

そして昨日、依頼でためたお金で自動筆記の杖を買った。

正直かなり使い勝手がいい。値段はかなりしたが、それだけの価値はあったと思う。

そのまま昨日は自動筆記の杖で魔物の討伐をした。

今日はこれから必要な旅の道具などを買ったが、今まで貯めていたお金の半分以上使った。

かなり痛い出費だったが、どちらにしても必要なものだったから割り切ろう。

結局、闇魔法はまったく覚えなかったが、水魔法や氷魔法はか
なり覚えることが出来た。

他の属性が出来ないか試していた時のことだが、他の属性は魔素は
感じるのだが使用はできなかった。

そのときに一つ明らかに他とは違う魔素を発見した。

本で調べると、無の属性だということが分かった。

無属性の魔素は感じる事が出来る人はいないらしい。

何故自分が感じる事が出来るのかは分からないが、あるものは使お
うと思う。

これからは無の属性についても少しずつ研究していこう。

【日付 新暦305年 5月30日 旅1日目】

今日王都リーガスを出発した。

集合時間の少し前、朝6時30分に城門前に着いた。

少し早過ぎたと思うが、問題はそこじゃない。そこじゃなかったん
だ。

7時を過ぎたあたりでおかしいと思ったんだ。

7時30分になってもまったく来る気配がなかった。

どうしようもないのでずっと待っていたのだが、伊藤が来たのは約
束の時間より4時間過ぎた11時だった。

旅の準備をしていたらしい。しかも支給されたお金で・・・。

そこはいいんだ。伊藤は勇者で、俺は勇者ではないのだから。

でもさ、謝ってくれたっていいじゃない。それ以外にももっとやり
ようがあったんじゃない？

遅れるならさ、遅れると伝えに来るとか伝令をよこすとかさ・・・。

旅は馬車をするのだが、みんなは屋根の下。俺は空の下。

何を言いたいかといたらね。馬の手綱を握ってるのは俺。しかも交代なし。

どうよこの差。さすが勇者、俺なんかとは扱いの差がちげえよ。

休憩のため馬車を止めて休んでいた時なのだが、金髪の子がのどが渴いたと言いだした。

そして突然、金髪の子に従者の癖に気が利かないわね。みたいな事を言われた。

紅茶でも入れろってか？

そのあと暗くなり始めたので、野宮の準備をした。俺が。一人で。俺が野宮の準備をしている間、伊藤は他の女の子とイチャイチャしてやがりました。

さすが勇者。ハレームだよハレーム。

ちなみに何故か財布を任された。いいのか俺で？まあ何にせよ初めて認めてもらえた様で嬉しかった。

自己紹介はしてもらってないけど。

とりあえず俺の凍らせて持ってきた魚を焼いてみんなで食べた。

そのあとみんなはテントの中に入っていった。

いいのか見張りをしなくて？

もしかして俺に一晩中やれと？

まあ魔法で俺が見張りをしたけど「コーションレンジ」ね。

そういえば、あれから習得した魔法を書いていなかったたのでここに書いておこう。

・コーションレンジ（水の球体。指定範囲内に登録しているもの以外が入ったら使用者に伝わる。）

・氷雨（範囲攻撃。空中から氷柱を降らす。）

- ・水の触手？（水の触手を地面から生やす。オリジナル。）
- ・ゲート（某魔法先生の魔法。水の転移魔法。オリジナル。）

以上が現在使える魔法の追加だ。

テントの中からあえぎ声が聞こえてくる。ナニとは言わないけどね。なんだよ。チクショー。伊藤、てめえは夜のほうも勇者なのかコノヤロー。

「見ろっ！これが俺の聖剣だ！！」ってか？
ふざけんじゃねーよ。

【日付 新暦305年 6月1日 旅3日目】

今日グルーブという街に昼ごろ着いた。

途中結構な数の魔物が出たが全て蹴散らした。

案の定、勇者たちは何もしなかった。

街に着いて早々金髪の子に財布の中身のほとんどを持っていかれた。何故必要なのか聞くと必需品を買うのと宿代らしい。

そして、明後日の朝7時に門の前に馬車を持って来てほしいと言っていた。

なるほど、俺は仲間はずれですね。

いいんですよ別に、独りのほうが気楽だしね。

しかし、このままだと確実に路銀がなくなるので、今日はギルドに行つてひたすら討伐の依頼を受けてお金を稼いだ。

依頼途中の話なのだが、一匹の黒猫がハウリングウルフの群れに囲まれていたところを助けた。

依頼の内容がハウリングウルフの討伐だったのでちょうどよかった。

依頼がすんだので帰ろうとすると着いてきたので旅のお供として連れて行くことにした。

雌だったので名前はミーコにした。

ギルドに依頼達成の報告を終えた後、近くにある安めの宿をとり、夕食をミーコと一緒に食べた。

ここ最近は無属性についていろいろ試しているが、やっと正確にコントロールできるようになった。

無属性の特徴はどうやら破壊に近いものを感じた。

とりあえずしばらくはコントロールの練習をしながら特長を把握し、その後魔法陣を作るといふ事になりそうだ。

やはり猫でも居たほうが一人であるよりはマシだった。

番外編 1 伊藤君 side (前書き)

登場人物の伊藤君の紹介みたいなものです。

伊藤君は考えがいろいろ足りないのに、賢い振りをしようとする子
です。

さらに詰めが甘い子でもあります。

番外編1 伊藤君 side

side 伊藤

良くも悪くも俺は普通だ。

そんな普通な俺は学校の帰りに拉致されました。

別に俺の家はお金持ちではないし、俺自身が重要な人物と言っわけでもない。

そんな俺がまさか拉致られるとは全く思わなかった。

しかも美人な女性に。

そしてこんなチャンスが自分に回ってくるなんて思ってもいなかった。

最初に言ったとおり、良くも悪くも俺は普通だった。

「異世界に行ってやって欲しい事があるの。」

真っ白な世界で彼女はそう言った。

彼女は自身のことを神と言った。

それに目の前で力を見せてもらった。

なんでも俺に異世界へ行ってやって欲しいことがあるらしい。

「何故僕なんですか？僕以外にも人間は居るでしょう。」

「特に理由はないよ？ただ君が行きたそうにしてたしね。剣と魔法の世界に。それといい子ぶらなくてもいいよ。」

何故この人はそんなことを知っているのだろう。
神だからだろうか？

確かに俺は異世界に行きたいし、いい子ぶっている。
何故異世界に行きたいか？決まっているじゃないか。

異世界に行く物語は行く人のほとんどが主人公になれるからだ。
だから行く事自体には賛成だ。

誰だって主人公になりたいだろう？俺だってなりたいんだ。主人公に。

ただ何をして欲しいのかによる。

行くかどうかの返事はそれを聞いてからのほうが良いだろう。

「分かった普通に話す。それにやって欲しいことって何だ？」

「魔王を倒して欲しいの。」

「魔王ってあの魔王？物語によく出てくる？」

「そうそう。あの魔王だよ。」

なるほど。

行くのはかまわないが、ある程度の力をもらおう。
神様ならそれくらい出来るんだろう。

「残念だが、俺には魔王を倒すほどの力はない。」

「そんなに強がらなくて良いよ。行きたいんでしょ？」

「た、たしかに行きたいのは行きたいが……。」

考えが筒抜けなのか？

まさかそう来るとは。

いきなりすぎて焦ってしまった。

「大丈夫だよ。ちゃんと力もあげるから。」

「力も。という事は他にもくれるのか？」

わざわざ何の力もない俺に頼むという事は魔王を倒せるだけの力をくれるんだろう。

これで俺は主人公になれる。さあ精々俺のために尽くしてもらおうか。

「当然。依頼の前払いとと思ってくれて良いよ。君には人に好かれる能力と魔力と魔法の才能をあげる。もちろん成功したら報酬もあるわ。」

人に好かれる能力もすごく魅力的だ。

これは決定だろう。

そうと決まれば、異世界でハーレムライフを過ごそうか。

クククク。今日は最高の日だな。

こんなチャンスが勝手に転がり込んでくるなんてな。

それに成功報酬って何だ？私をもらってくださいってか？

クククク。嬉しくて笑いがとまんねえ。

「分かった。行く。」

「そう？気に入ってもらえてよかったわ。」

そういうと彼女は俺に指を向けて魔法陣らしきものを描いた。その直後俺の全身が輝き、すぐに止んだ。

強くなったような気分だ。最高にハイってやつだぜ！

フハハハハハ！

「今ので終わりか？」

「ええそうよ。じゃあそろそろ行ってもらおうね。ああ、後他の人の召喚に割り込む予定だから。」

「わかった。」

「じゃあね。今度会う時は魔王を倒した時か死ぬ時、どちらかしらね。」

そういった彼女の顔は何故かとても楽しそうだった。

そして、次の瞬間俺の意識が落ちた。

次に目覚めたのは生け贄の祭壇みたいな場所だった。

しかし、何故か安部のヤロウが居た。

こいつを見てるとイライラしてくる。

まるで俺を自分と似たような存在を見るような目で見やがる。

そんなことを考えていると、扉が開いて巫女っぽい服を着た美少女が入って来て、少しだけ驚いた顔をした。

そして俺たちに向かって聞いてきた。

「あなたたちが勇者様です・・・か？」

とりあえずここは肯定しておくか。

「そうですね。」

「うんそうそう。勇者、勇者だね。ん？勇者？」

安部の野郎寝ぼけてやがるのか？

もしかしてこいつも自称神に送られてきたのか？

もしそうなら早急に退場してもらおうか俺に従ってもらおうか。

俺のハーレムライフを邪魔されたら最悪だしな。

まあ、こいつごときができる訳ないけどな。

「そういう貴方が私を召喚した人ですか？」

「ええ。そうですね。彼方達にしてもらいたいことがあります召喚させてもらいました。」

「して欲しいこととは？」

十中八九魔王を倒してくださいとかだろうな。

まあ、ハーレムライフのついでにやってやってもいいが、報酬としてお前をもらうけどな。

こいつ美人だしな。

「あなた方に魔王を倒しても欲しいのです。」

ほらな。きたぜ魔王討伐。

普段なら絶対断るが今は自称神にもらった力があるし、何よりこいつとお近づきになりたいしな。

とりあえずここは受けておくか。

「俺は構わないですよ。それよりも先に貴方の名前を教えてくださいますか？俺の名前はタクヤ・イトウ。タクヤと呼んでくれ。」

「はい。タクヤさん。私はエイミイ・テストロッサと申します。よろしく願いしますね、タクヤさん。」

安部が空気になりつつあるな。

うんうん唸ってる所を見ると、こいつは自称神に送られてきたわけではなさそうだな。

まあそれならそれで邪魔にならないなら構わないけどな。

「それでは、お疲れでしょうが少しついてきていただけますか？魔法の適正検査をさせていただきたいのですが。」

「ああ、構わない。俺も知りたいしな。」

「魔法？ん？魔法？何故に？」

「知りたいということは魔法がない世界から？」

「ああ。そつだ。」

「そつですか。魔法の説明はしたほうが？」

「いや、いい。「ぜひお願いします。」大まかなことはだいたい分かってるしな。詳しい事はまた今度教えてくれ。」

「分かりました。ではこちらに。」

安部、完全に空気ww

ここまで空気だといっそすがすがしいな。

番外編1 伊藤君side(後書き)

早速、お気に入り登録してくれた人が居るようでとても嬉しいです。
欲を言えば、感想くれると嬉しいです……。

まあこんな作品を読んでくれるだけで御の字ですがww

魔法のまとめ(前書き)

別に読まなくてもいけます。

作者の整理みたいなものです。

矛盾があればいってください。

魔法のまとめ

【魔法を発動するためには】

魔法を発動するためには基本魔法陣と魔力を使用して行う。

<発動までの過程>

- ? 使いたい魔法の属性の魔素を集め魔力にする。(属性があつていれば、体の中で生成されている魔力を使うことも可能)
- ?? の魔力の内、微量の魔力で魔法陣を描き形にする。
- ?? の魔法陣に? の魔力を流す。
- ? 魔法の成功をイメージする。

<魔力と魔素>

魔力は魔素の塊である。

魔素には基本の4種類、中位の2種類、上位の1種類がある。

基本の4種類は火、水、風、土。

中位の2種類は光、闇。

上位は無。

現在上位属性の無は感じられる人は居ないらしい。

人にはそれぞれ集められる魔素は限られていて、普通は1種類のみ。ただし、無属性以外の魔素を感じることは出来る。

【魔法の発動方法】

<基本>

・セルフモーション

自分の心の中で魔法陣を描き、それに魔力を通して発動。

一番発動速度が速い発動方法。

欠点としては慣れるまでは魔法陣を心の中で形にするのに時間がかかり、集中力が必要。

・ペーパーモーション

紙などに魔法陣を描いて、それに魔力を通して発動

(1つの魔法陣ごとに一回しか使えない)

欠点が多く、今はあまり使われない方法。

大きな欠点としては、紙に魔法陣を描く時に形を残すのに多くの魔力を消費する。

紙に込めた魔力が時間とともに減り、一定以下になると使用できなくなる。

以上の二つがあげられる。

・スティックモーション

杖などを用い空中または地面などに魔法陣を描き、それに魔力を通して発動

(特殊な杖が必要)

一番消費魔力の少ない発動方法。現在の主流。

欠点としては発動に少し時間がかかるところのみ。

<応用>

・トークモーション

複数人で同時に呪文を詠唱をして発動。

唯一魔法陣が必要のない魔法。

一人でも出来る事は出来るが、膨大な魔力と呪文が必要ためほぼ不可能。

現在は使われていない（スクエアのほうが効果、威力、効率が高いため）。

・スクエアモーション

複数人で一人に一つずつ魔法陣を描いて発動。
トークと同じで膨大な魔力が必要。

此方は呪文の代わりに魔法陣を使用している。
魔法の発動方法の中で一番効果、威力が高い。

記録4（前書き）

今回で日記形式は一旦終了です。

<作者と友人2>

友人Iとマ ドナルドへ行く道中のこと。

マ ドナルドへ行く途中に住宅街があるのですが、そこにある一軒のお宅（出口さん）の前を通りかかった時、友人Iがいきなり「出口・・・入れへんやん!？」と呟きました。
この子は時々おもしろいです。

もう2年も前のことだったんですが、いまだに忘れる事ができません。

記録4

【日付 新暦305年 6月2日 旅4日目】

朝起きると隣に黒髪の少女が寝ていた。

意味が分からなかったが、とにかく寝ていたのだ。

目を擦りもう一度見てみるとミークだった。

幻惑を見るとはこちらに来てからの疲れが今来たのだろうか？

体調に気をつけるようにしようと思う。

今日は久しぶりに夢を見た。

過去の夢だ。オレとアイツの夢。あいつの顔はよく思い出せない。

話の内容もあまり覚えていないが、遊びの話をしていたと思う。

オレが役者でアイツが観客。

アイツが言った。「楽しませてね？」

オレが言った。「ああ、もちろんだとも。だが、お前こそオレを楽しませてみる。」

そして、オレは言った。「さあ、公演の時間だ。」

今日も路銀を稼ぐため1日中ギルドの依頼をこなした。

依頼が終わったあとは旅に必要な水や食糧などをとりあえず5日分
買い込んで、馬車に積み込んでおいた。

結局持つて行かれたお金の分ぐらいしか稼ぐことが出来なかった。
伊藤たちは何をしているんだろう。

伊藤たちも金を稼いでいてくれると助かるのだが、おそらく稼いでいないだろうと思う。

正直な話、俺が居なかったらここに来るまでの食料などはどうするつもりだったのだろうか？

結構疑問に思う。

【日付 新暦305年 6月3日 旅5日目】

結局、朝あいつらは約束の時間から遅れてやって来た。

しかも次の街は約5日程かかる場所に向かうと、伊藤君が言ってきた。

さすがに食料が心もとないので買いに行く旨を伝え、2日分ほど買って馬車に戻るとみんながすごく不満そうな顔で出迎えてくれた。

とりあえずミーコを膝の上に乗せながら馬の手綱を握って次の街へと向かった。

今日も一人で野営と食事の準備をした。

その上、夜間の見張りもすることになった。

まあ魔法を使っているだけなんだけどね。

テントには入らず焚き火の前でミーコを抱きながら無属性のコントロールの練習をした。

そろそろ慣れてきたので、明日からは使えそうな魔法を作っていると思う。

今夜もやつらのお楽しみの声をBGMに寝ることとなった。

【日付 新暦305年 6月8日 旅10日目】

また新しい街に着いた。

一体どこに向かうんだろう？俺たちって魔王を倒す旅に出てるんだよね？

ラスボスの魔王どころか中ボスすらみねえよ。

まあまだ10日しか経ってないから仕様がないう事なのかもしれないかな？

今回も着いて早々財布の中身を持っていかれた。

それも全額。むしろ仕様がないうから妥協してそれだけでいい。みたいなことを言われた。

何か勘違いしてると思うんですが、お金は無限じゃないですよ？

今回は緑色が持ってた。おとなしそうな顔をしてあげつない事をするな。

次は3日後朝7時に街の入り口に集合らしい。

今、気づいたことなのだが、これだけ一緒に旅をしているのに自己紹介をしてもらってない。

仕様がないうので赤髪の子を赤子。

緑髪の女性を緑子。

金髪の子を金子。

と心の中だけで呼ぶことにしよう。

最近ミーコと意志の疎通が出来るようになってきた。

と言うよりもミーコは頭がいい。俺の愚痴言を頷きながら聞いてくれるのだ。

どうやらある程度人語を理解しているようだ。

もうミーコが可愛過ぎて仕方がない。

そして今回もギルドで依頼を受け魔物を討伐しまくった。

正直かなり強くなったと思う。ちなみにギルドのランクがいつの間

にかBになっていた。

そのうち最高のSまで行くんじゃないだろうか？

とりあえず集合は明日から4日後の12日なので、それまでギルドでお金を稼いでおこうと思う。

とりあえず作る魔法を決めた。

以下の通りだ。

・SLB（某魔法少女の魔法。OHANASHIする時に使っらしい。簡単に言くと破壊光線）

・エクスプロージョン（爆発魔法。）

以上の2つを作ろうと思う。

とりあえずSLBはさすがに燃費が悪いので、先に周りの魔力を集める練習をしようと思う。

魔力を周りから集めるのは旅の間は結構役に立つだろう。

明日から先にエクスプロージョンの魔法陣を作ろうと思う。

街に居る間しかまともに休憩できないので、しっかりと休憩しておこうと思う。

まあ依頼も受けなければいけないが、あのBGMがないだけ100倍ゆっくりできるってものだ。

今日はこのままゆっくりしよう。

【日付 新暦305年 6月10日 旅12日目】

朝起きるとまた隣に女の子が寝ていた。

さすがにおかしいと思ったので勇気を振り絞り起こしてみた。必死に起こしたが、なかなか起きなかった。

さすがにそのまま時間をつぶすのはもったいなかったなので先に朝食を食べた。

帰ってくるるとちょうど女の子が起きていた。

女の子から話を聞いたところによると、どうやらミーコらしかった。どうやらミーコは猫ではなく魔族のサキュバスらしい。

なんでも魔界から追われて弱っていたところ、魔物に襲われていたらしい。

そのときに魔力の多い俺が助けたのでちょうど良いと思いついてきて、寝ている俺から少しずつ魔力を吸い取っていたそう。

今日吸い取った分で大分魔力が回復したそうで、猫の姿から人間の姿に戻ったみたいだ。

何故追われていたのかは少し気になるところだが、複雑な事情がありそうなので本人が話してくれるまで待つことにする。

ミーコがこのままどうするか気になったので、あてがあるのか聞いてみたところ、特にないと言っていたので一緒に来るか聞いてみた。するとミーコはぜひ付いて来たいと言っていたので、これから一緒に旅をすることになった。

とりあえず名前がミーコはおかしいのでなんて呼べばいいのか聞いてみると別にミーコで良いらしい。

と言つよりミーコが良いと言っていた。本当にいいのだろうか？

魔王が本当に居るか少し気になったので、本当に魔王がいるのかミーコに聞いてみた。

しかし帰ってきたのは微妙な返事だった。

居るには居るが今現在魔王の席は空席らしい。

最近、魔物の活動が活性化してきたのは、魔王が空席になって抑えきれなくなってきたらしい。

もともと魔王は悪というより魔物や魔族の王と言っただけで、人間の王と少し違うのは魔王自身がかなり強いということだ。

何故魔王には強さが必要なのかというと、魔物や魔族は自分の欲望を優先するのでそれを抑え付ける必要があるから強さが必要との事。その抑え付けていた魔王が突然消えたらしい。そしてストッパーのなくなった魔物の活動が活性化した。

魔物は人を食すことが、最も効率よく力が上がる方法らしい。そのため魔物は人を襲うらしい。

魔族も人を食うことは食うのだが、時を重ねれば勝手に力が上がるのでそこまで直接人を襲うことはないらしい。

ミーコとの話が一通り済んだ後、ミーコが戦えることを知ったのでギルドに登録をしに行った。

Bランクになると推薦が出来るらしいので、俺が推薦してミーコモDランクからの開始になった。

その後魔物討伐の依頼を受けてミーコと一緒に依頼をこなした。

少し驚いたのはミーコが意外と強かった。

使える属性は火だったので、俺との相性はいいのだろう。

俺の魔法は基本威力が物足りないのでちょうどよかった。

依頼達成の報告後宿に戻ってミーコの服を買って、夜ご飯を食べた後、早速エクスプロージョンの魔法陣の作成に取り掛かった。

さすがに1日では出来なかったが、だいたいの構想は練れたので明日、本格的に作り始めようと思う。

よく考えるとベットが一つしかなかったことに気がついた。

ミーコに俺が床で寝るからベットで寝て良いと伝えると、一緒に寝ても良いと言っことなので、少し窮屈そうだがミーコと一緒に寝ることになった。

疲れているのでベットで寝るのは嬉しいのだが、別の意味で寝にくそうだ。

記録5 ドラゴン編・上（前書き）

初めて主人公の名前が出てきます。

<作者と友人3>

小学生のころ、友人S君が俺のエロさを証明する！といってゲ
アダルトコーナーに突撃して店員に捕まっていました。
そんな彼も今は立派な大学生です。

記録5 ドラゴン編・上

朝、起きるともう日が昇っていて外が騒がしかった。

ちよつと普通と違うような騒がしさだ。

少し気になったので朝ごはんのついでに宿屋の主人に聞きに行こうか。

そつと決まれば服を着替えるか。

そつだ、横で寝ているミリーコを起こさないと。

「ミリーコ。起きろー。朝だぞ。」

「んうー。あと3時間。」

「いやいや。長いからね？そこは普通あと5分とか言つとこるじゃない？」

「……………」

はい。無視です。完全な無視頂きました。

「無視してもだめだ。さあ、起きるんだ。朝はこんなにすがすがしいぞー。」

「……………」

「しゃーない。置いていくか。まあ、起きないならしょうがないか。」

「いやあ！おいてかないで！」

いきなり起きたミーコは俺にしがみついていた。少し涙目である。何か可愛いな。こう、なんていう過保護欲を誘うというかなんと言っか。

「ぶをつ！？びっくりした。急に起きんなよ。」

「だって、置いていくって……。」

「いやいや。朝ごはんにね？そんなに心配すんなよ。」

「心配？なんで？私も朝ごはん食べるの！置いてかないで！」

はいはい。分かってるんだよ？自意識過剰だってね。でも一回は言われたいじゃん？あんなこと。

とりあえず騒がしさの原因も知りたいし、そろそろ行くかな？お祭りだったら今日は少し遊ぶかな。

資金は貯まったしね。ちよっとくらい使ってもいいだろう。

「ミーコ、とりあえずとっとと着替えな。」

「りょーかい。」

先に行って待っておくか。

「ドラゴン？」

「ああ、そうだよドラゴンだ。それもブラックドラゴンだ。」

主人に聞いたところ、騒がしさの原因はブラックドラゴンの所為らしい。

なんでも、そいつがこの街に向かっていているという報告があり、街中の人々が逃げる準備をしているらしい。

「ドラゴンってそんなに頻繁に来るもんなのか？」

「はあ？何言ってるんだよ。頻繁に来るわけないだろう。」

「そんなものか。」

「そんなものだよ。あんたもとっとと逃げな。見たところ戦いの役に立ちそうにないしな。」

まあ、弱そうに見えるのは仕方ないけどね。

もうちょっとソフトに言っただけだったな。

そう、戦いに向けてなさそうとか。

いや、それも嫌だな。

てか、いつそのこと最後のは言わないで欲しかった。

「そうするよ。朝ごはんも見たところ無理そうだし、パーティーと合流して逃げることにするよ。」

「すまんね。じゃあ支度があるからここらで失礼するよ。」

「ああ、忙しいのに時間取らせて悪かったな、うまく逃げろよ。」

「坊主もな。」

ちよつど話が終わったところにミーコがやってきた。

ミーコはまだ少し眠たそうだが、そんなことは言ってられないな。

「ミーコ。朝ごはんは中止だ。」

「えええ。何で？」

「ブラックドラゴンが近づいてるらしい。」

「ふうん。それで？」

「それでって……。みんな逃げるから朝ごはん作る人が居ないんだよ。とりあえず俺たちも逃げるぞ。」

「そうだね。今のセイメイじゃ勝てそうにないもんね。」

「悪かったな。ドラゴンに勝てるってどんなトンでも人間だよ。」

「さあ？で、どうするの？逃げるのはいいけど勇者（笑）たちは「勇者のあたりのニュアンスがおかしかったけどまあいいか。どうするか。」

これだけ慌ただしいと伊藤どもを探すのは手間だな。

街の入り口で少し待って、来なければ最悪ミーコと二人で逃げるか。

「とりあえず街の入り口まで行こうか。で、待っても来なかったら二人で逃げよう。」

「あーい。」

馬車を取りに行く途中果物屋があったからリンゴを買おうとしたらただでくれた。

それをミークと食べながら道を歩く。

街はすごく慌ただしく、みんながみんな焦っていた。命にかかわることだしな。

「おっちゃん。馬車取りに来ただけど。」

「ああ、あんたか。勝手に持ってきてくれ。悪いけどこっちには忙しいんだ。あんたも速く逃げたほうがいいよ。」

「ありがとね。じゃ、おっちゃんも早く逃げなよ。」

街の入り口で待っていると武装した集団が出て来た。その中に伊藤パーティーがいた。

「ねえ、セイメイ。あれ勇者（笑）じゃない？」

声を出して（笑）って言いやがった。

勇者（笑）にはつつこまねえぞ。

てかなんでこいつがそんなネタ知ってた？

「そつつばいな。あの集団は討伐部隊か？」

「さあ？どつする？」

んー。

とりあえず手伝った方がいいか伊藤に聞きに行くか？

「取り合えず話を聞いてくるわ。ミーコはどつする？」

「着いてくよ。勇者（笑）は見てておもしろいし。」

「じゃ、一緒に行くか。」

伊藤に近づくと此方に気づいた後少しむっとした顔をしたあと話しかけてきた。

「安部か。どこに行ってたんだ。」

「いや。馬車を用意してたんだ。これは討伐部隊？」

「ああ、そつだ。お前も参加しろ。盾くらいにはなるだろ。」

何だこいつ。

それは思っても言ったらだめだろ。

ホント性格変ったな伊藤。

「それよりも、その子誰だ？」

しまった。

完全にミーコのことを考えてなかった。

まあ適当に言い訳をしておくか。

「ああ、その子は俺がギルドの依頼を受けた時にピンチに陥ってたところをg「君。名前は?」「」

無視されたorz
なんだよこいつ。

「なんで教えないといけないの?」

よし、ナイスミーコ!
もっと言ってやれ!

「知りたいからだよ。俺はタクヤ・イトウ。よろしく。」

そう言っつて伊藤はミーコに手を差し出したが、ミーコは握手せずその手を凝視して言った。

「ふーん。勇者(笑)ね。手、退けてくれる?邪魔。」

よく言っつたミーコ!
俺はお前を尊敬する!

「ふっ、まあいいよ。そのうち嫌でも俺の事気になるから。」

ふっ、まあいいよ。そのうち嫌でも俺のこと気になるから) ^ . .
^ (キリッ! だつてよwww

伊藤きめえwwwマジきめえwww

「そんな時は来ないよ? 自意識過剰だね。」

「取り合えず安部。お前は精々俺たちの盾になれよ！」

俺に八つ当たりとか……。

俺関係ないじゃん。

一応討伐部隊には参加するか。

盾にはならんけど。

記録5 ドラゴン編・上(後書き)

やっぱり会話は難しいですねえ。

感想お待ちします。

記録6 ドラゴン編・下（前書き）

<私と父親>

私の父はY新聞で働いています。

毎日朝刊の配達のため午前1時に起きなければいけないので、私が起こしているのですが、この前起こした時に怒られました。会話形式にしてみると下みたいな感じでした。

「お父さん起きや〜」

ユサユサ

「ん〜！なんでやねん！」

「何でって、仕事やる？」

「何の仕事やねん！」

「新聞の配達ちゃうん？」

「何でオレがいかなあかんねん！！お前がいけや！」

「いやいや。そんなんええから。はよ起き。」

「ちっ。」

そのまま起きて着替えて配達に行きました。

すごく起こしたこっちが悪いような気持ちにさせられました。

普段は優しい父親なのですが、寝起きはとても機嫌が悪いか、かな

り頭がおかしいかのどちらかです。
私の周りはおもしろい人が多いのですが、皆さんの周りはどうなの
でしょうか？

記録6 ドラゴン編・下

現在、街から少し離れた荒野で討伐団の皆さんとドラゴンを待ち伏せしています。

ちなみに俺とミーコの位置は隊列の一番後ろの伊藤パーティーの前です。

結局は盾になってます。断りきれませんでした。だってNOと言えない日本人ですもん。

取り合えず前に覚えておいた水の結界魔法の準備をしておこう。備えあれば憂いなしの心です。

「ほんとに来るのかな、ミーコ。」

「さあ？でも比較的大きな魔力の塊は近づいてくるよ？」

「はいはい。それですね。で、ブラックドラゴンってどんなの？」

少し気になったことをミーコに聞いてみた。

やはりドラゴンでもいろいろ居そうだし、情報は大切だしな。聞いておいて損はないだろう。

「黒色の竜。」

知ってるよ……。

それぐらい知ってるよ。

「もつとないのかよ。こっ、すごい角がある。とか」

「大きな羽があるよ。」

知ってるよ・・・。
それぐらい知ってるよ。

もういいよこいつに聞いたのがいけなかったんだ。

まあ、実際見てみれば分かるだろう。

ま、この人数居れば勝てるだろう。勇者パーティーも居るしな。

そう思っていた時期が俺にもありました。

「来たぞー!!」

ようやく来たのか。

つて、結構でかいな。あんなのに勝てるのか？

「ミーコ、危なくなったら逃げるぞ。」

お、前のやつらが突っ込んだな。

ん、あれ？ちよつと待て、口が紅く光ってないかあれ？

ちよおおおおい！前のやつらが焼かれてる!？

何だよあれ!？巨兵並じゃんあの攻撃!!

てか、こっちに来たああ!!

「『闇夜』喰らいつくせええええ！」

俺の右腕から出た闇が炎を喰らい始める。
しばらく炎と拮抗した後、一気に炎を喰らいつくした。

「フハハハハハハハハハ！！どうだ見たか俺の闇を！！さあ、そのままその木偶の坊も喰らいつくしてやる！！」

そのあとは一方的な侵食。

ドラゴンも炎を吐き抵抗はするが、吐いた炎は全てやみに飲まれ消えていく。

そして、ドラゴンを俺の闇で喰い、消滅させた。

ドラゴンを消滅させた後、俺は一気に力が抜けすぐに気を失った。

痛さで目が覚めた。

すごく痛い。呼吸するだけでもう全身が痛い。

み、水……喉が渴いた。

「み……み」

「あ、セイメイ起きた？もう！起きていきなり私を呼ぶなんて！そんなに私の事を愛してるの？」

ちげえ！水をくれ！

何だよこいつ。すげえ勘違いしてるよ……。

「み……み……をくれ……。」

「そんな！こんな真昼間から私をくれだなんて！セイメイ変態！！」

ちっげええええええよ！

なんだよこいつ。もう、めんどくせえよ。

こいつこんな性格だったのか？

取り合えず水が欲しい。

「水をくれえっ！！」

「きゃっ！？びっくりしたじゃない！怒鳴らないでよ！あげないわよ？」

お前が怒鳴らせたんだろっが！

でも、なんだかんだ言いながら水を用意しているミーク。

「あ……がと。」

「もう！飲めないんでしょ？飲ませてあげるからじっとして。」

んぐんぐ。

はああ生き返った。

そっぴやなんでこんなに全身が痛いんだろう？

「何で俺は寝てるんだ？」

「忘れたの？ドラゴンと戦って力使いすぎて倒れたの。」

「ああ、そついやそつだったな。ミーコが運んでくれたのか？」

「ここは恐らく前に使っていた宿だろう。それにしても伊藤はぜってえ殴る。」

「そつだよ。大変だったんだから。まったく力使いすぎるなんて・・・。しかも3日も寝てたんだよ？」

「ごめんな。後、ありがとう。ミーコがいなかったら死んでたわ。」

「それは別にいいの。ただ、あまり無茶しないでね？」

「ああ、善処する。」

喉を潤すとだんだん眠たくなってきた。

自然とまぶたが重くなってくる。

今思い出したら、あの時の俺はなかったと思う。

うん。何かすごい痛い子になってたね。きもち悪いぐらい。

いまさら後悔だよ。唯一の救いはミーコしか居なかったことだな。

ホント、伊藤とか居たらマジ恥ずかしさで死ねたわ。

「まだ眠いんでしょう？今の間に寝ておいたら？」

「ああ、そつする・・・。おやすみ、ミーコ。」

「うん。おやすみ、セイメイ。」

ミーコの声を聞いた後、俺は再び意識を落とした。

あと、ぜってえ伊藤は殴る！！

記録6 ドラゴン編・下(後書き)

明日は大学の見学とかいろいろあるので更新できないかもです。
すみません。

番外編2 伊藤君side(前書き)

遅れてすみません。

いろいろ忙しくて……。

え？お前のことなんかどうでもいいし、待ってない？
そ、そんなぁ……。

番外編 2 伊藤君 side

伊藤 side

召喚されてからここ数日間、俺は魔法の練習をした。

最初は本当に使えるのか怪しいぐらいで、魔力があるのかすらも分からないという状況だった。

だが、一度魔力の流れが分かってから魔法が使えるようになるまでにそう時間はかからなかった。

最初は感動したと同時にこんなものかという落胆もあった。だってそうだろ？

自称神から能力とかもらってこの程度だけ？
誰だって落胆するよな？俺だってそうだ。

まあ、これでもすごいらしいし納得するか。
そして今から模擬戦をするために調練場にエイミイたちと向かっているところだ。

相手はどっかの部隊の隊長らしい。

男に興味ねえからどこの部隊かは覚えてねえ。

「タクヤ様。大丈夫なのですか？いくらタクヤ様が勇者といっても私は心配です。」

エイミイが俺を心配してくれている。

最近エイミイは俺のことをタクヤ様と呼ぶようになった。
俺のことを勇者と認めたのだろうか？

「そつだよ！タクヤおにいちゃん！」

俺の左隣に居た金髪ツインテール少女、エリスがエイミーに同意するように俺を心配するような目で見てくる。

「大丈夫だ。俺はなんだ？勇者だろ？それくらい出来て当然だ。」

「そうですけど・・・やはり、私たちは心配ですわ。」

俺の右後ろにいた緑色の髪で長髪の女性、マリアも頬に手を当てながら困ったような顔をしている。

「大丈夫だって。タクヤは勇者だぜ？それに模擬戦なんだから怪我はあっても死ぬことはないしな。」

俺の左後ろに居た赤髪で短髪の女の子、リリーが俺の肩をつかみながらそう言った。

この4人は俺の魔王討伐について来る子たちだ。4人ともかなり可愛い、または美人だ。

エイミーは黒髪で大和撫子といった感じの少し日本人っぽい女の子だ。

日本人の俺からすれば一番なじみやすい子だ。

そして、おれが初めて関係を持った子でもある。

エリスは金髪で釣り目少し性格がきつい俺にはかなり甘える。

少し幼い気もするが、十分可愛いのでそこら辺は無視する。

言ってみれば妹キャラだ。

マリアは緑色の髪で長髪、3つほど年上だ。

おっとりした性格で、いかにも絵に描いたようなお姉さんといった

感じた。

何よりも！マリアは巨乳だ！それも今まで見たことのないような。

そして最後は赤髪で短髪の女の子リリーだ。

少し名前とキャラが違っているが、実は言つと時々見せるしぐさがすごく可愛い。

例を挙げると、大雑把に見えて実は料理や裁縫がうまい。や、リリーちゃんと呼ぶと顔を真っ赤にして上目遣いで睨んでくるところ。などがあげられる。後でものすごく怒るが。

そしてこの4人全員が俺のハーレムの一員だ！！

ククククク。たまらねえぜ。日本に居たころでは女の子は二次元のみしか知らなかったしな。

それが今はどうだ？こんな美人美少女囲まれての生活だぜ？

ホント自称神様には感謝しないと。ふははは。笑いがとまらねえ。

「まあ、どっちにしろこれくらい出来ないと魔王を倒すなんて夢のまた夢だ。」

「そうですね・・・。」

「納得しろ、エイミー。それとも何か？俺を信用できないと？」

「い、いえ。そんなことは・・・分かりました。その代わり大怪我だけはしないでくださいね？」

「ああ。分かってるよ。ありがとうエイミー。」

そう言っただけ俺はエイミーの頭をなでると、安心したようで俺に微笑んだ。

「エイミイずるい！！タクヤおにいちゃん！私も！」

「はいはい。エリスはわがままだな。」

エリスの頭をなでるとエリスは気持ちよさそうに目を閉じた。

妹キャラはやはりいいな。面倒くさいが、その見返りが大きいしな。

そのまま歩いていると調練場に着いた。

真ん中にはどつかで見たような顔のおっさんが剣を二本持って立っていた。

その後ろには兵士が30人ほど綺麗に整列していた。

「おお、勇者殿。お待ちしておりましたよ。さあ、早速始めましょう。」

そう言っておっさんが二本のうち一本の剣を俺に渡してきた。

少し重いがまあ持てないこともない。

身体強化が出来るようになれば楽なんだがな。

あいにくまだ覚えていない。

「ああ。よろしく頼む。魔法はありますか？」

「ええ。使えるのなら構いません。」

使えるのなら・・・か。

すごいなめられてるな。ここは一発派手にやってやるつか。

「分かった。それじゃあ、始めよう。」

そういうとおっさんは少しはなれた後、後ろに並んでいる兵士の人を開始の合図を頼んだ。

「タクヤおにいちゃん！がんばってえー！」

「タクヤ様頑張ってくださいーい！」

後ろからエイミィとエリスが手を振りながら応援してくれている。ここはかつこいいところを見せて好感度をあげておくか。

「おやおや。勇者様はずいぶん好かれておられるようですね。」

「まあな。さあ、始めるんだろ？」

「そうですね。」

そういうとおっさんは剣を構えた。

俺とおっさんの距離は約10メートルほど。

見た目そんなに速そうじゃないし、魔法は間に合うな。

よし、一発目から魔法で攻撃してやる。

「それでは、始め！！」

兵士が開始の合図を出した。

と、同時におっさんがこっちに駆けてくる。

だが、俺のほうが速い！

俺は心の中で描いた魔法陣に魔力を流す。俺とおっさんの距離は約5メートル

そして魔法を発動し、10本の光の槍を駆けてくるおっさんに向けて射出する。

が、その瞬間おっさんの姿が消えいつの間にか俺の首に剣が当てられていた。

「勇者殿は私を殺す気ですか？」

「撃てるなら魔法を撃つていいと言ったのはあんただ。」

俺はおっさんを睨みながらおっさんの挑発に答えた。

どうやらなめていたのは俺のほうだったようだ。

だが、このおっさんはこの強さから見ると恐らくこの国最強だろう。つまり、いままで戦ったことのない俺からすれば勝てない相手だ。負けたのは仕様がないうことだろう。

そのあと何回か模擬戦をして昼飯を食べるため一回戻ることにした。調練場を出て少し歩いていると、珍しい顔を見た。安部のヤロウだ。安部か・・・負け続けでイライラしてる俺の怒りの捌け口となってもらおうか。

「おつ。安部じゃないか！久しぶりだな。てか、まだここに居たんだなww」

おっ少しむかついた顔だな。
そうだな。そういえばこいつの魔法の才能はたいしたことないんだよな。

直接は見てないから知らないが、検査の時の王や大臣のこいつを見ていたあの残念そうな顔。
もう、それだけで気が晴れる気がするな。

「ああ。伊藤君か。久しぶりだね。」

普通に返してきたな。つまらねえ。

しかもこのまま去ろうとしてやがるし。

そうはさせねえよ。

「魔法のほうはどうだ？俺は闇以外全部使えるからちよつと覚えるのに時間がかかったぜ。

まあ、こっちに来てから1週間で全種類の槍ぐらいは使えるようになったけどなww」

どうだこれで？

何か微妙な顔をしてるが、成功みたいだな。

恥ずかしそうに何か言おうとしてやがる。

「伊藤君はすごいね。まるで前の世界とは大違いだ。俺のほうはまだまだって感じかな。

精々君の足手まといにならないようにがんばるとするよ。」

少し気に障る言い方だがこれがこいつなりのほめ方なんだろうな。

まあ、こいつのために時間をつぶすのももったいないしそろそろ行くか。

「そうか。ま、がんばれ。んじゃ俺は忙しいから行くとするわ。わりい待たせたな、行くぞ4人とも。」

去り際に安部の顔を見てみるとかなり悔しそうに顔をしていた。

これはかなり癖になりそうだなww

番外編2 伊藤君 side (後書き)

パチンコ屋のアルバイトの面接を受けるんですが、服装はどうしたらいいんでしょう？

感想、評価、こうしたらいい、こうして欲しい。
などあればよろしく願います。

感想が少なすぎて泣きそうです・・・。
何でもいいので感想ください。

記録7

夢を見た。

オレとアイツが話をしている夢。

真っ白な部屋の中で二人の男女がテーブルに着いて話をしている。

「今回は少し趣向を変えてみようと思う。」

「へえ。例えば？」

「そうだな。××を××とかだな。」

「××を×してどうするの？」

二人の声がよく聞き取れない。

何の話をしているのだろうか？

「平和な世界でしばらくは放置する。」

男が突き放したような言い方で言葉を吐く。

「えええ。それじゃつまらないんじゃない？」

女は心底つまらなさそうに言い、男をじっと見つめる。

しかし、その目は男の次の言葉を促しているようだ。

だが、女の目を男は全く気にしておらず、女を見ながら胡散臭い笑

みを浮かべている。

「ああ、これだけだとつまらない。目的は平和ボケしたらどういう行動をとるかを見るためだ。それだけじゃなくて、その世界でもう一人適当に人を選んでソイツに踊ってもらう。人形のようにな。どうだ？」

「そうよね。あなたはそんな退屈な存在じゃないものね。」

「当たり前じゃないか。」

「身近な奴って言ってもどうやって選ぶの？」

「そうだな。お前が選ぶ。で、ある程度の力をやれ。」

「ふふつ。私が手を出していいの？私は観客よ？」

「いいさ、たまにはな。」

そう言うと二人は休憩するように紅茶を口にする。

「そうね。偶にはそんなのもいいわね。楽しませてね？」

「ああ、もちろんだとも。だが、お前こそオレを楽しませてみる。」

そして、オレは言った。「さあ、公演の時間だ。」

目が覚めると隣でミーコが寝ていた。
体の痛みは大分取れたな。

まあ、まだ全身が痛いかな。

取り合えず腹も減ったしミーコを起こして飯でも食いにいくか。

「おい、ミーコ、起きろー。」

ユサユサ

「うふふふふ。釣れたわ。しかもこーんなにたくさんの人が。う
ふふふ。」

うわっ!?

なんだこいつ!?メチャクチャキモイな・・・。

一体何の夢を見てるんだ?

「おい飯だぞ。」

「うふふ。そうね。ご飯ね。でもそれはトイレだよ?そんなものを
食べちゃダメよセイメイ。」

「俺ッ!?お前ホント何の夢見てんの!?てかお前の中の俺は何な
の!?!」

ここまで来ると変というより、いつそすがすがしいくらいにおもしろいな。

ちよっといういろいろ耳元で囁いてみるか。

「知ってるか?すずめって食べるんだぜ?」

「そう。」

「そんだけかよ!？」

「もうちょい試すか。何かこのままだと負けた気がするしな。」

「俺、実はロリコンなんだ。」

「やめて!触らないで!むしろ近寄らないでこの変態!！」

「すごいな。」

「これ会話できるんじゃない？」

「もういっちょいくか。」

「お前はもう死んでいる。」

「あゝ あん?」

ゴスッ

「いった!?!?てか、こっわ!?!殴られたんですけど!?!」

「しかも、めっちゃ怒ってるんですけど!?!」

「機嫌を直すために最後の一回!」

「愛してるよ。ミー!」。

「そうなの?」

「あっれ?」

「何かミーコの目開いてるんですけど。」

「しかも、ミーコの顔が赤いんですけど。」

めちゃくちゃ恥ずかしいんですけど。

「起きてた？」

「うん……。」「

「どっから？」

「それは……。その……。」「

すごい気まずいよ？

これ絶対聞かれたよね？

どうしよう？取り合えずなんでもなかった風に装おうか……。いけるかな？

「ミ、ミーク、あ、あしやご飯。」「

あ、かみまみた。

これは気まずいよ。

取り合えずなんでもなかった感じを装って先に行こう。時間が空けばマシになるだろうしな。

ガチャッ

「そ、そうだね。ご飯だね。でも、そこはトイレだよ、セイメイ。」「

うっぷす。

さっきの寝言はこれを暗示していたのか。若干雰囲気が違う気がするけど。

「あ、ああ。先にトイレに行ってから行くことと思って・・・。」

「そ、そう。じゃ着替えるから先に行つてね。」

「そうしてくれ。」

一回の食堂に着くと宿屋の主人が出迎えてくれた。

「おお、坊主じゃねえか。もう体は大丈夫なのか？」

「ああ、すまないな。何日分料金たまつてる？」

「ははは、何言つてんだよ。坊主に街を救ってもらつたんだ払わなくていいぜ。」

「ああ、知つてたんだ。金のことは助かるよ今あまり持つてなくてね。甘えさせてもらつよ。」

「知つてるも何も、お前さんは有名だぞ？この街を救つたヒーローだつてな。」

どうやら俺がドラゴンを倒したのはかなり広まつてるみたいだな。あまり目立ちたくはないんだが・・・。そつえば伊藤たちはどうしたんだ？後でミーコに聞くか。

料理の注文が終えた頃にちょうどミーコもやって来た。
まだ少し顔が赤いな……。
せつかく忘れかけていたのにまた思い出した……。

「なあ、ミーコ。伊藤たちはどうしたんだ？」

恐らく先に行ってるんだろうな。

まあ、それはそれであいづらから離れられて楽ではあるが。

「伊藤（笑）？まだこの街に居るよ？」

「へえ意外だな。それはまた何で？」

「セイメイを待ってるらしいよ。」

おっとこれは意外だな。

俺のことは一応仲間だと思ってるのかな？

あの時、伊藤たちは逃げたけど仕方ないのかな。

まだ実践も少ないだろうし、あんなの見たら強くても逃げたくもなるわな。

仕様がな、殴るのは勘弁してやろう。

「そうか。集合場所とか時間とかは何か聞いてるか？」

「特に聞いてないよ。ただ、起きたら西地区のローズって宿屋に来てくれたって。」

「なるほど。まあ飯喰ったらブラブラしながらいくかな。」

それにしても西地区の宿屋ってどれも高いところばっかだったよう

な・・・。

まさか、俺を差し置いて高いところに泊まってるのか？

そんなまさか・・・。な？だが、ありえそうな気がする・・・。

もしそうだとしたら許せねえ。

俺はこんなに安い、いやこれだと主人に悪いな。

俺はこんなにお手ごろな宿に泊まっているのに、君はお高い宿屋の部屋であの子達とにやんにやんってか？

べ、別にうらやましくなんかないんだからね！！

ぷっ。俺きめえww

ま、べつに俺にはミーコが居るもんね！

あんな人のことを空気のよ風に扱うような女の子よりもよっぽどミーコのほうがいいわ。

ごめん、嘘。ちょっとうらやましい・・・。

記録7（後書き）

評価、感想、アドバイスなどお待ちしております。

記録8（前書き）

< 作者と父親2 >

少し昔のことなのですが、父親に寝言で「キ、キリンの首とってき
てくれえ。」と言われたことがありました。一体何の夢を見ていた
んでしょう？

記録 8

セイメイです。

扉を開けるとそこには豪華な部屋が広がっていました。どこにこんなところに泊まるお金があったのかと伊藤に聞きたいです。

部屋の広さは5人くらいでも軽く過ごせそうな広さで、家具は見た目からして高そうなもので揃えられている。

中央のこれまた豪華そうな2つのソファーに伊藤君パーティーが座っています。

高そうなティーセットを使ってお茶を飲みながら……。もう一度いいます。

どこにこんなところに泊まるお金があったのかと伊藤君に聞きたいです。

「伊藤君、久しぶり。まだ待っててくれたんだね。」

「当然だろう？」

もしかしたら伊藤君は言い奴なのかもしれない。

疑ってた俺を許してくれ、伊藤！

「お前に用事があったんだからな。」

裏切られた……。

いや待て、早まるな。

もしかしたら、もっとこうアレな感じなのかもしれない。

そう、ツンデレ的な何かなのかもしれない。

裏切られたと決め付けるのは早計過ぎる。

「そう。用事って?」

「俺と決闘しろ!」

ハイ!裏切られた!

俺、裏切られた!

もういいよ、ホントこいつにはもう何にも期待しないよ。

しかも隣とかに座ってる伊藤パーティーの皆さんからの視線が厳しいよ。

ビシバシ刺さってくるよ。視線が。

「タクヤおにいちゃん、ホントにするの?」

あれ?ちょっと待って、金子ってそんな性格なの?

前、俺には女王様みたいな態度で接してきたよ?

全く気が利かないクズね。みたいな事言ってたよね?この子。

キヤラ変りすぎだよ!女王様から一転して妹だよ!

俺も言われたいね!おにいちゃんって。

「ああ。心配するな、勝てるから。」

うえーい。すっごいなめられてるね。

てか俺了承してないからね。

「何で俺と決闘?」

「決まってるだろう?ブラックドラゴンを倒したお前を倒せば、俺はブラックドラゴンより強いということになるからな。」

そうなのか？合ってる様であつてない理屈だな。
まあ決闘くらいならいいか？別に俺に失うものなんかミーコぐらいしか居ないし。
でも、ただでやるのはなあ。

「でも俺には得るものがないよ？これ以上、怪我するのも嫌だし。」

「まあ、お前も病み上がりだし今日から2日待ってやる。3日後に北地区の広場に昼12時に来い。街の許可は俺が取ってやる。」

無視かよ……。

了解も何もねえよ。

しかも微妙な優しさ見せてるし。

「分かった。もういいよ。やるよ。」

「不満そうだな。俺には関係ないが。」

関係大有りだよ！！

お前の図々しさには全世界の人々がビツクリだよ！

はあ、取り合えずやれば伊藤が納得するんならやってやろうか。出来ればやりたくはないがな！！

「もういい？さすがに病み上がりでしんどい。帰らせてもらうよ。」

そう言い残して俺は終始空気だったミーコと部屋の外に出た。

てか、お茶の一つも出なかったな。部屋に入ってすぐの所らへんで立って喋ってたし。

もうちょっと客として扱ってくれてもいいんじゃない？

今日は少しギルドで簡単な依頼をこなしてから帰るか。

「どうしたんだ、ミーコ？ずっと静かだったじゃないか。」

「伊藤（笑）は見てるに限るからね。話に参加するとアイツの私の気を引こうとする態度がウザイし。」

すげえ言われようだよ、伊藤。

だが心の中でもっと言っちゃれって思ってる俺はダメ人間なのだろうか？

違うよね？

はい！てなわけでギルドにつきました。ギルドまでの道のりはカットです。

特に語ることもなかったしね。って何考えてるんだろ？

まあ取り合えず着いたんだ。

昼ごろとあってなかなか人が少ないな。

依頼受ける奴はたいてい朝から行くしな。

まあ人が居ないほうが楽だしいいか。

ミーコと一緒に依頼を探す。

今日は簡単なものから行こうか。なまってると思うし。

依頼

・ランクB

バツツカツチの討伐。

・ランクB

ジャージーデビル、3頭の討伐。

これはさすがにキツそうだな。

てか、地球じゃ未確認生物ばっかじゃねえかよ。

依頼

・Dランク

魔ウサギ10羽の討伐。

・Cランク

ゴブリン20匹の討伐

ここらあたりだな。

てかホントに魔ウサギ多いな。どこにでも居るんじゃないのか？

取り合えずゴブリン行っとくか。あんま強くないし。まあ、数が多
いけど。

依頼書を掲示板からはがしてミーコに見せる。

「ミーコ。これどつ？」

「いいんじゃない？それよりも体は大丈夫なの？」

「大丈夫、大丈夫。大分治ってるっばいし、もし俺が無理でもミー
コならゴブリン程度いけるだろ？」

「いける、いけないじゃなくてさあ。勝手に決闘も受けるし。」

「ええ。反対だったのかよ!? 黙ってるからいいのかと思ってた。」

「べつにいいよ?」

「どつちなんだよ!？」

「ただ、少し私に聞いて欲しかったな、ってね。」

少し顔を紅くしながら言うミィ。

なんとという可愛い生物だ!

それよりも、忘れかけていた今朝の記憶がよみがえってきた……。

「い、ごめん。今度からは聞くようにするよ。じゃ、じゃあこれ受けてくるから待ってて。」

はずかしい! 非常に恥ずかしい!

取り合えずこの場の雰囲気から逃げるためにもカウンターに依頼書を持っていく。

「すみません。」

あ、かみまみた。

受付の女の子若干笑ってるよ……。

そりゃ笑うよな。いきなり走ってきて口を開いたと思ったらすみましえんだもの。俺だって笑うよ。

今気付いたけど俺は焦ると噛むみたいだな。これからは気をつけよう。

さあ、仕切りなおしだ!

「すみません。この依頼いいですか？」

「はい。いいですよ。ギルドカードをお願いします。」

さすが受付嬢！なかったことにしてくれたぜ！わふー！

おっと、バカやってないでギルドカードを出すか。

ギルドカードを渡すと受付嬢が少し作業してから薄いガラス板の上にカードを置いた。

説明すると、仕組みは分からないが今カードの置いてある薄いガラス板に線で繋がっている機械らしきものに情報を入力する。

そして薄いガラス板に情報が転送され、ギルドカードを置いてカードの情報を書き換えるらしい。

詳しいことは教えてくれなかった。ギルドの最重要機密なんだと。

「はい、終わりましたよ。それではお気をつけて。」

「ありがとう。」

さてと、ミーコと一緒に行って、ちゃっちゃと終わらせましょうか。

記録8（後書き）

感想、評価、アドバイスなどお待ちしております！

記録9 (前書き)

総合評価が1000越えました！。
皆さんありがとうございます！
これからもよろしくお願いします。

今回の話は伊藤君との決闘。
初めてのまともな戦闘シーンです。
これが私の今の限界ですorz

記録9

「ミーコ、依頼受けたし行こう。」

「あーい。」

うん。さっきの気まずさはもうないな。

ちやっちゃんと終わらせますかあ。

っとその前に、昼飯を食べないとな。

「その前に昼飯食べるか。」

「そうだね。何食べる？私は何でもいいよ？」

「せっかくだし一回宿に戻って宿で食うか？」

「あーい。じゃ、行こう！お腹減ったしね！」

こいつの中であーいって返事はマイブームなのか？
可愛いからいいけど。

宿に着いたあと一旦部屋に戻り、いろいろ準備をしてからミーコと一緒に一階に降りた。

一階の食堂で主人に料理をいろいろ注文した。
料理が届くまでミーコと話をして待つ。

「なあ、ミーコ。お前って何歳？」

「私？さあ、何歳だろう？途中から数えてないから分からないよ。」

「マジかよ……。数えてたのって何歳までなんだ？」

「うーん。150〜300くらい？」

「ミーク、お前ってすっげえアバウトなのな。
間が開きすぎだよ。」

「へえ。お前って年よ」 ガシツイ

「ガツハア！？」

痛い痛い！！

頭が割れるぐらいに痛い！
もげるもげちまうよ！

「ちよ、ちよつとやめてえ。もげる、もげるよお。頭がもげるよお。
頭から手を離してえ！」

「すこし、頭冷やそうか。」

「いたーい！どこの魔王様だよ！？
てか、お前が頭冷やせよ！！」

「ご、ごめえん。謝るからあ。許してえ。お願いだから頭から手を
離してえ！」

「さあ、謝りなさい。さっさと謝りなさい。」

「年寄りって言っただけでびびるだけだあ!!」

痛い痛い!!って、さらに強くなったよ!?

はっ!年寄りってワードがいけなかったのか!?

謝ろう。すぐ謝ろう。じゃないとホントに頭がもげるうって痛い痛い!!

「ずびばせえん!ミィコ様はまだまだ若いです!!まだまだピチピチですう!!」

はあ、やっと開放されたあ。

あと少し遅れていたらホントに頭がもげていたかもしれないな。

ふう、危なかったぜ。

「よくできました。私は嬉しいですよ?」

嬉しいも何もほとんどお前が言わせたようなものだからな?

ホント、痛かったよ。

舐めた真似しやがって。いつか痛い目見せてやる。覚えていやがれ!直接は言えないから、言うのは心の中だけにしよう。そっだ、そうしよう。

もう一回アイアンクローされるのは嫌だ。

「それはよかったね……。」

「はい。待たせたな。」

ちょうど料理が来たようだな。

主人よ、もう少し早く来て欲しかったよ……。

料理を食べた後、俺たちは依頼を終わらせに森に来た。
確かゴブリン20匹の討伐だったよな？
群れで行動してたら面倒だな。

「ミーコ。ゴブリンたちを発見したら足止めは俺がするから攻撃は
ミーコがやってくれる？」

「あーい。」

「森は燃やすなよ？」

「それくらい分かってますう。」

「ならいいよ。ちなみに燃やすんってのはフリじゃないからな？真
剣に燃やすなよ？」

「えっ！？違ったの!？」

分かってなかったー！
あつぶねえ。危うく森を燃やされるとこだったよ。
にしてもゴブリンいねえな。

歩くこと約1時間。

やっとゴブリンの群れを見つけた。
見つけたのはよかった。いや、よくなかったのかもしれない。
なぜかって？

それはね

ゴブリンが20匹どころじゃなかったからさ！

100匹はいます。ゴブリンが。気持ち悪いわ!!
わらわらと集まりやがって!ちよつとは人の苦勞も知りやがれ!
取り合えず約束どおり足止めするか・・・。
杖で【氷の鎖】の魔法陣を描いてそこに魔力をなごって、いってええええええええええ!!
尋常じゃないぐらいに全身が痛い!なぜ!?何故今日はこんなに痛いことばかり起こるんだ!?

「ミ、ミ、ミ。ちよ、ごめん。ゴブリンたち頼む。何か魔力を流そうとしたら激痛が・・・。」

「ああ、なるほどね。わかったよ。邪魔にならないところで休んでね。」

「ごめんな。」

「いいよ。セイメイの役に立てるのは嬉しいしね。」

「ミ、ミ、ミ。君はメチャクチャいい子だよ。」

「ごめんね。さつきいつか痛い目見せてやるっていつて。」

「ミ、ミ、ミの邪魔にならないように離れてよう。」

「それにしても何故魔力を流した瞬間に全身に痛みが走ったんだ?」

「セイメイ!終わったよ!。」

「りよーかーい。今行くて、おいっ!ちよ、おま、森が燃えてんじゃねえか!!轟々燃えてんじゃねえか!」

「そつだね。」

「決闘だよ、決闘。」

「どうしようもないと思うよ？ 解決法としては、決闘の日まで魔法
使いまくってくしかないね。」

「はあ、だよなあ。」

最悪だ。もつと考えてから決闘を受ければよかったな……。
負けるのは構わない。けどなあ。どうせやるなら勝ちたいし。
いつそのこと決闘自体を断るか？

いや、それはダメだ。負け犬の烙印を押される……。

それだけはなんとしてでも阻止しないと。
なんとか決闘の日までにせめて魔法を使えるぐらいにはしないと……。

はあ、鬱だ。

「こうなったらひたすら魔法の練習をするか。付き合ってくれるか
？」

「もちろん。無理だけはしないでね？」

「ああ、なるべくな。」

そのまま夕方ごろまで森でひたすら魔法の練習をした。
といってもほぼ発動させることは出来なかった。

発動したとしても、威力が弱かったり、発動後の操作が出来なかつ
たりでかなり大変だった。

決闘当日。

あれから魔法の練習をしまくった。

結果、だいたい使えるようになってきたが時々失敗する。

痛み自体は大分収まってきたのだが、やはりまだ無くなるには至らない。

現在は約束の広場に向かっている。

はあ、ホント行くのヤダ。

胃が痛い。きりきり痛むぜ。

でも行かなければならない。負け犬の烙印だけは押されたくないんだ。

「よお、安部。ちゃんと逃げずに来たんだな。」

「ああ、伊藤君。」

逃げたかったよ、とは続かなかった。

「さあ、注意事項だが、殺しは無し、制限時間は15分。なるべく周りのものを破壊しないようにする。そんだけだ。」

「殺しは分かるけど、制限時間は設けるの?」

「ああ、お前は守りが得意みたいだな。何時までも続けられたら面倒だしな。」

確かに守りは得意だけども。死なないために必死だったし。なぜそうも自信满满と自分に有利な条件を言えるのだろうか。

「分かった。僕の方はいつでもいいよ。」

「そうか。じゃあ、エイミー開始の合図を頼む。」

「はい、タクヤ様。」

「それでは、始め！」

開始の合図と同時に魔法陣描く。

魔法陣の形は水の防御魔法

アクアシールドR。

薄く広い円形の防御魔法だ。水で構成されているため炎には強い。

伊藤はおそらくいきなり攻撃を仕掛けるはず。

なら防御魔法を、と考え発動。

と、同時に伊藤の槍が完成。

種類は3種類、炎、水、光。数は30。

つて30！？多いな・・・。

それにしても多属性の魔法を同時に行使ってのはすごいな。さすが勇者様。

ギリギリ耐え切れるか？威力次第だな。

少し多めに魔力を流す。

次の瞬間30の槍が迫ってくる。

が、その全てが防御魔法に吸い込まれていく。

全身に痛みが駆け抜ける。

痛みに耐えながら、もう一度アクアシールドRを準備しつつ、伊藤を対象に氷の鎖を発動。

するとレジストされた。

力技かよ……。

レジストするには自分の使える属性で、尚且つ相手がつぎ込んだ魔力の3倍は必要なのに。

次は多めに魔力をつぎ込んで氷雨と水の触手を発動。

伊藤はそれを見越していたのか光の結界魔法を発動した。

結界魔法に当たった氷柱と触手が次々と消えていく。

その瞬間、地面が揺れた。

危険を感じ横に飛ぶ、するとさっきまで俺が居た所に光のデカイ針が生えていた。

地面が揺れなかったら直撃だったな。こいつ俺を殺す気かよ。と出てきた光の針に呆然としていると複数の槍が飛んでくる。

ギリギリで準備しておいたアクアシールドRを発動した。

約40もの槍がシールドに刺さった後、俺は身体強化をかけて氷の鎖を準備し、伊藤に突っ込んだ。

伊藤は一瞬驚いた顔をした後、すぐに気を持ち直してこちらに突っ込んでくる。

伊藤と衝突する寸前に顔面に向けて拳を振りぬく。

が、顔を少しずらすだけで避けられ、逆に顔面を殴られかなりぶっ飛ぶ。

ここまでは計算どおり。

俺は倒れる寸前にある魔法陣を用意して、残っている魔力の半分をつぎ込んで、準備しておいた氷の鎖を伊藤に向けて発動。

伊藤は驚いた顔をしながら急いでレジストしようとしている。

そして、伊藤のレジストが終わる前に俺の魔法が完成。

全ての魔力をつぎ込んで昨日完成した強力な魔法
プロージョンを伊藤に向ける。

エクス

しかし、体に激痛が走り、エクスプロージョンが発動することはな
かった。

「やっと終わりか。最後何かをしようとしたようだが、無駄骨だっ
たみたいだな。じゃあな。しばらく寝てろ。」

氷の鎖をレジストした伊藤はすぐに槍を発動させ俺に向ける。

最後に見たのは得意げにニヤつく伊藤と俺に迫ってくるいろいろな
色の槍だった。

記録9（後書き）

感想、評価、アドバイスなどお待ちしております。

記録10(前書き)

遅くなってしまうてすみません。

一段落ついたので不定期になります。が更新していきます。

それにしても更新待ってる人いるのかなあ？

「知らない天井だ。」
などと言ってみる。

おそらくここは勇者（笑）と決闘するまで泊まっていた宿だろう。
あの決闘のことをはっきり覚えてはいないが、ぼんやりとは覚えて
いる。

おそらく俺は伊藤に負けたのだろう。いや、負けた。
なぜなら俺の魔法は発動しなかった。

もともと、成功確率の低い魔法の発動に賭けなければいけないよう
な状況に追い込まれた時点でほとんど俺の負けだった。

あんな状況で成功するなんてもう主人公以外の何者でもないしな。
俺の敗因は完全に伊藤のことを舐めていたことだ。

違うな。伊藤を舐めていただけではなく自分の力を過信しすぎてい
た。

多少強くなって一人でクエストもこなし、ミーコと一緒にだったとは
いえドラゴンをも倒した。

だが、それだけだ。それなのに何でもできる気になっていた。
ここで気づくことができたのは不幸中の幸いだっただろう。

この世界でなら俺は殺されていても文句は言えない。
本気の戦闘で負けるということはそういうことだ。

だからその点を考えると伊藤に負けたのはかなり癪だが、あの野郎
に少しだけ感謝しよう。本当に少しだけかな？1cmいや、1mmく
らい。

そう、これで俺はまだまだ上を目指せる。強くなることに貪欲にな
れる。

多少強くなったことで満足してられない。
そうだ！満足なんかしてられる訳がない！

なぜならあのムカつく野郎に負けたのだから……。いつか仕返

しをしなければ俺の精神が持たない。絶対馬鹿にしてくるよな？ア
イツ……。

胃が痛いよ。

まあ、反省はここまでだ。

早速だが修行しなければならぬ。それも今まで以上に。

でも伊藤について行きながらできるか？

できるか？じゃないな。やるんだ。

よし、とりあえず飯食おう。腹減った。

てか、俺はいつたいどれくらい寝ていたのだろう？

しばらくベットの上でこれからのことを考えているとミーコがやってきた。

ミーコの話聞く限りどうやら俺は10日間ほど眠ったままだったらしい。

傷はかなりひどくしばらくは動けないらしい。というよりも動けないだろう。

動こうとしたら激痛が走る。

どうもかなりの怪我だったらしい。それも下手をうてば死んでいたぐらいのものだったそうだ。

ということだ。伊藤は殺す気だったのだろう。

だってそうだろう？俺は死にかけたのだから。

あの野郎は本当に死ねばいいと思う。後ろから女にさされて死ねばいいと思う。

いや、殺す。俺が殺す。そうじゃないと気が治まらねえよ。

「ん？ちよっと待て。勇者様ご一行は？あいつらが俺のために待つ

ていてくれる訳がないと思うが……。まさか!? 待っていてくれているのか!？」

「そんな訳ないじゃない。先に行ったよ? 私も連れて行かれそうになって大変だったんだからね。」

「ですよー」。

「うん。そうだよな。うん? わかっていたよ。もちろん。ただ……。そういった可能性もあるかな? ってね? いや、別に期待はしてなかったよ? ほんとだよ?」

「天井なんか見て一体誰に話しかけてるのよ。でもよかったじゃない? 自由になれて。」

「そう、だよな? うん、そうだな。」

まあ、これでみっちり修行ができる訳だ。うん。問題なし問題なし。

「なあ、ミーコ。これからさ、ちょっと本気で修行しようと思うんだ。」

「なんで? セイメイは今のままでもまあまあ強いよ?」

「それだけじゃだめだ。やつに勝たなければならぬ。主に俺の精神衛生上のために。」

「そう。ならがんばって?」

「なんで聞くんだよ！？そこはもっと私も手伝うよ！とか応援するよ！とかいろいろあるじゃあないか！」

「だってやるのは私じゃないもん。」

「そうだけどさあ。もっと何かあっていいんじゃない？」

「セイメイ。心配しなくても私はあなたについていくからね？あなたが私のこといらないうつて言うまで。」

なん・・・だと・・・？

か、かわいいじゃねえか。

やめろ！やめてくれ！そんなに輝いた笑顔を俺に向けなくてくれ！いやああ、ときめきが止まらないいいいい！！

「ふ、ふんっ。そこらへんはミーコの好きにすればいいんじゃないか？」

俺キメエWWW

もっと何かあっただろうよ、俺。

どこまでもヘタレな俺、プライスレス。

「あーい。じゃ、どこまでもセイメイについて行くね。」

この流れを変えなければ。早急に。

そっだ！ご飯を要求しよう！

ちよつどおなかも減っていたことだしね。

別に俺が気まずいとかじゃないよ？ほら、ミーコが気まずいと思っ
てね？

もういいよ。なんだよこれ？
どう考えてもおかしいだろ？だってさっきまでラブコメな雰囲気
流れていたのに一瞬でこれだぜ？ほんと、やってられないね。

「ご飯持ってきたよ？」

「あ、ああ。ありがとうな。」

あれ？落ち着いたのかな？

まあ、いいや。きつと俺を気遣って、さっきのことはなかったこと
にしてくれているのだろう。

そんなことよりも目の前にあるお粥に集中しよう。

きつと病み上がりだからおなかに優しいものをわざわざ頼んでくれ
たのだろうな。

か、かわいいやつじゃないか。

「いただきます。」

俺がスプーンでお粥を掬い口に運ぼうとした瞬間、ミーコの一言が
突き刺さる。

「そ、それひよりも！」

「ぶっ、ぶほっ！ぐはっ！あ、熱っ！！」「ほっ、っ」「ほっほっ！痛い、
痛い！のどがああああ」

「じ、ごめ！？お、おちついて！？ここまで大惨事になるとは思っ

記録10(後書き)

感想、アドバイス、評価お待ちしております。

記録11(前書き)

遅れてすみません。

ここ1週間ほどは徐々に体を動かしながら魔法の勉強をした。
ん？修羅場？なにそれこわい。

ともかく一人で勉強しながら思ったことが一つ。

技術的なことは本でもかまわないが、誰かから師事を受けた方が断然早く上達する。さらに、優秀な師に巡り会うことができたなら戦闘技術についても学ぶことができるだろう。

ということでも師匠または学校を捜そうということになった。

今のところの候補は Rond 魔法学園に行くことだ。

Rond 魔法学園は募集の範囲は広く入試などはないのだが、入学金や授業料などが結構高いらしい。

一応、特待制があり特待生になると授業料を払わなくてよくなり、その他特典があるのだが卒業後5年間の従軍義務があつて、その後も結構いろいろと面倒らしいのでただ魔法を学びたい人は素直にお金を払った方がいいらしい。

他に別途試験などがあるらしいが、あまり詳しくはわからなかった。一方フリーの魔法使いのもとで学ぶならそこまでのお金はかからないとのこと。

しかし、大抵優秀な魔法使いは国に所属しているらしいのでなかなか優秀なものは見つからないそうだ。

なので、今のところはお金を貯めつつ Rond 魔法学園があるという国、Rond 王国に行こうと思う。

ただ、今から向かうとなれば途中からの編入になる。

そして今はミーコに入学金を稼いでもらっている。

予定通りいけばミーコと一緒に学園に入学することができるだろう。

その間に俺は体を完全に治し、少しでも多く魔法の知識を身につけるといふことだ。

問題がなければ大体あと8日ほどでこの町を出てロンド王国に向かう予定になっている。

ミーコには悪いが俺がまだ万全ではないため、あと5日ほどは入金のために一人でクエストをしてもらうことになりそうだ。本当にすまないミーコよ。

まあこれらがこれからの予定になりそうだ。

授業料などは向こうでクエストをしながら貯めて払うことになると思うが、そこら辺は無事入学できてから考えようと思う。

いくら学園で教えてもらえるからといっても今から勉強しておくにこした事はない。という事で魔法の勉強を進めておく。

とりあえずは今までの復習をしていこうと思う。

この前、決闘について反省したが、具体的な事は考えていなかった。主に技術でなにか足りなかったのか？

決闘で足りなかったものは近接戦闘の技術、捕縛魔法の強度、攻撃魔法の命中精度や威力、そして最後に戦術。これらがあげられると思う。

近接戦闘の技術は独学では無理があるから学園で教えてもらおう。戦いの戦術は本で学べるのかな？わからん。

攻撃魔法の命中精度や威力と捕縛魔法の強度は魔法の改良で何とかなるだろう。

魔法については今できる事なので今やっておき、作ったものを学園についてから先生に意見を聞きながらいろいろやるう。

という事で魔法を改良、作成しようと思います！

とりあえずお気に入りの捕縛魔法から改良していこうか。

•
•
•

はい、できました！
ん？途中経過？

いいじゃないか。俺は細かい事は気にしない。

とりあえずできました。約2日程度かかりました。

まあ、大体コンセプト通りかな？

名前は決まっていけど効果は強力な捕縛魔法だ。

見た目は激しく地味で主に手と足を輪かみたいなもので縛る感じのやつだ。

わかりやすく言うと足も縛る事ができる手錠だな。

魔力消費の効率も結構いいし、使い勝手はいいと思う。

他にこれを作っているときにたまたまできた魔法もなかなか使い勝手がいい。

こいつは後のお楽しみだ。

今日はリハビリがてらミークと町へ探索に向かうつもりだ。
という事でミークを起こしましょう。

「おーい、起きなさい。朝ですよ？」

「んっふう。」

うはっww

なんというエロさww

これはイタツラするしかないぜ！

みんなもそれを望んでいるのだろう？いい、言わなくてもいい。
聞かなくてもわかるぜ！

さあ、いごうか。
俺のターン！

- 1、さわる。
- 2、言葉でイタズラ。
- 3、放置。
- 4、観察。

さあ、どれだ？

- 1はきついな。うん。俺には無理だな。
- 3はないな。うん、ない。
- 4は一番気持ち悪いな。これはだめだ。
- 2だよな、普通に考えて。これしかない。

あれ？なんかデジャビュが・・・気のせいだよな。
という事で2番に決定！ヘタレとか言うなよ？

実際この光景を目の前にすると1を選択するとかできないからな？
だってあれだぜ？

ベッドの上で掛け布団を抱き枕にして横向きで寝ているんだぜ？
パンーでTシャツのみの状態でな！

これの破壊力はすごい。かなりヤバイ。
これのすごさを語ると時間が足りないので割愛させまらおう。

セイメイ作戦行動を開始する。

「おーい。起きてますかー？」

よしよし。返事はないな。

うん？返事がない？まあいいや、ちょっと嫌な予感がするけどまあいいや。

俺は細かい事は気にしない。
よし、定番の耳に息を吹きかけるといふ有名だけど普段やらないけどっていう謎な行動をしよう。

フー。

あれ反応がない？

いや、地味にぶるぶる震えてるな。

「うふっ。あは、あははははははははははは。」

「なんぞ!?!」

一体どうした!?!

何がどうなってどうした!?!

「ほんととセイメイって学習しないね。」

笑いながら起きるミーコに俺は恐れを抱く。

そつえば前にもこんな事が・・・。

いや、思い出すな。思い出してはいけないんだ。

覚えていたらいけないから忘れたんだ。

人間って言うのはそういうものなんだ。

そつだ! これも忘れないと。これも覚えていたらいけない事なんだ。
だから忘れるんだ。

・
・
・
・
・

「さあ、ミーコ起きたのならさっさとご飯食べて町にいって。」

「あ、ああうん。ご飯はいいけど、どうしたの？いつもと反応が違
うよっ。」

「？何が？」

まったくミーコは…寝ぼけているのか？

「ううん。わからないならいい。」

「そうか？なら寝ぼけてないで早く行こう。」

「いつもと違う……。」

食堂につくと少し朝ご飯の時間からずれているためガラガラだった。
左端の方に席を取りおっちゃんに朝ご飯を注文する。

「おっちゃん。いつものお願い。」

「あいよ。今日はデートでもするのか？」

デート……だと……？

一体誰と誰が？

ま・さ・か

俺とミーコなのか？

今まで気づかなかったが成り行きとはいえ俺はかなり好運なのは

ないだろうか？だってミークはまあ人間ではないが人間だ。あれ？人間じゃないけど人間？

まあ、そんな事はいい。ミークは美人だ。それも結構レヴェルの高い。

という事は俺は伊藤に負けていない？勝ってはいないけど負けても
ないよな？

え？人数が違う？質で勝ってたよ！

「ちがうよ。単にリハビリだよ、セイメイ？」

「そうですねー。」

ま、予想はしていたよ？ほんとなのですよ。

「そうかい。」

・
・
・
・
・

「さあ、飯も食べたし行きますか。」

「そうだね。どこに行くの？」

「そうだな、適当にブラブラしようか。」

「あーい。適当だね、セイメイは。普通そついつのって考えてから誘うものじゃない？」

「残念だけど女性とデートなんてした事ないんだよ。」

「これってデート？」

「いや、別にあれだよ？デートがいいとかそういうのじゃないんだよ？」

「いやいやいやいや。ちがうよ？あれだからね、女性に慣れてないっただけだからね？」

「はいはい。わかったから行こうよ。」

「いや、ミーコが聞いてきたんじゃないか……。」

人通りの多い市場を適当にブラブラ歩いていると古びた本屋を見つけたので入ってみたところ、かなりいろいろな古書を見つけた。

中には日本語で書かれた本などもあったが特に役立つものではなかったのでほうっしておいたが、店を出るときに一冊だけ目に留まる本があった。

【魔法の勉強本 著山田次郎】

なんとありきたりな名前。

安いな昼食一人分か。金はまだあるし買うか。

「ミーコ。これ買っていくわ。先に外に出ておいてくれ。」

「あーい。はやめにね。」

カウンターで寝ている女の人に声をかける。

「おねーさん。会計お願いできる?」

「んっうあ?」

なにこれ?

涎を垂れている顔をこちらに向けるおねーさん。

顔は美人だよ?

こっちは美人多いね。

「会計お願いできる?」

もう一度言つと若干目が覚めたのか目をこすりながら俺の焦点合わす。

「ああ、はいはい。これね。これ読めるの?」

読めると言つたら変な人かな?日本語で書いてあるし。
適当に答えておこつか。

「珍しいからね。」

「ふうん。ま、いいわ。はい銅貨1枚ね。」

「あいよ。」

銅貨一枚を財布から取り出して渡す。

「はい、ちょうど。」

「ありがとね。」

記録12（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

いつの間にかPVがすごいことになってました。

感想のほうも返信できていませんが全て読ませていただいています。
本当にありがとうございます！

相変わらずの亀更新ですが、新作共々今後もよろしく願います。

記録 12

店から出ると外は大分賑わいを見せている。

皆さんの笑顔が眩しい。

そついや前の世界では町がこんなに活気付いてるってことは無かったな。

先ほど買った本を右脇に抱え、残金の確認をしているとミークがこちらに気づいてやって来る。

「本買ったの？」

「ああ。珍しい字で書いてあったからね。」

「それで買ったの？無駄遣いはあまりよくないよ。」

言われなくてもわかってます。

お前は俺のかーさんかバカヤロウ。

「わかってるよ。そんなことよりもどっか面白い店探そう。」

「はいはい。」

如何にも面倒臭そうな素振りで答えたミークが先に歩き出す。

俺もそれに続き歩いていって一つ目に付いたものが合った。

店が並んでいるところに如何にもお祭りの屋台と言った装用の店があった。

その店を良く見てみるとどうやらあまり客足はよろしくないらしいか

った。

店の外装とその雰囲気を引き寄せられて近寄ってみると、売っているものがなかなか面白いものだった。

まるで本のようなその表紙には二人の男と女の絵が描いてある。

「おっちゃんこれ何？」

店主らしき人に尋ねてみると一瞬驚いたような顔をしたあと、その少し強面な顔に満面の笑みを浮かべ早口言葉のように喋りだす。

「これかい？これは絵本だよ。」

ただ他の絵本とは少し違っていて、絵がかなり多いものになっているんだよ。

いや、しかしこれに目をつけてもらえるとはね。おじさんも嬉しい限りだよ。

ここで2、3日この本を売ってるんだけどなかなか売れなくてね。」

7割ほど理解したが速過ぎて残りは理解できなかったぞ！

それにしても絵があまりうまくない。

これでは買う人は居ないとは言わないが少ないだろう。

中をパラパラとめくりながら読んでみる。

内容は男女二人の恋愛物だった。よくありそうな話だがなかなかうまくかけていると思う。

絵はうまくないがな。そこは譲らないよ？

「おっちゃん。紙とペンある？」

ここで俺の絵をこのおっちゃんに披露してやろうではないか。

「あるが、何に使った。」

「いやあ、久しぶりに絵を描きたくなってね。」

おっちゃんから受け取った紙に絵を描いていく。

もちろん萌絵だ。

キャラクターはミーコだぜ！

もちろん人間形態で尚且つネコミミとシツポ付だヤツフウウウウ

！！

なんかテンションあがってきた！

髪の毛はもちろんアレンジしてポニーテールに。

やべえ、おいしそう。おっとイカンイカン。正気を、保たねば。

そんなこんなでミーコを書いているとおっちゃんは終止興味深そうに見ていた。

おっちゃんが出来上がった絵を見て、目を輝かせている。

「すばらしい！すばらしいじゃあないか！

これほどの絵を俺はいまだかつて見たことが無い。

そしてこのわきあがる感情は一体？」

「それが萌えだ。」

などとかっこいい雰囲気ですべてみたが、傍から見れば相当気持ち悪いだろうな、これ。

おっちゃんに絵の描き方を教えながら萌えについて語る。

最後にサンプルを数枚あげてからその場を離れた。

店から離れて十数歩でミーコが居ないことに気がつく。
どうやらはぐれてしまったようだ。
自分の欲望に走ったことをひどく後悔した。

・ ・ ・ ・ ・

しばらくミーコを探して歩いていると少し暗い路地に入ってしまった。

大きな怒鳴り声が聞こえ気になって行ってみると、そこには男二人に絡まれている金髪の変な女が居た。

「てめ、とつとと謝れ！」

「誰が謝るものですか！この世が滅んだところで謝りませんわ！」

おうふ。なんとという言葉遣い。これはかかかわると絶対に碌な事にはならない。

そう感じて脱兎のごとく逃げ出そうとすると変な女がこちらに跳びついて来る。

「逃がしませんわ！」

かなりの力で腹の辺りをホールドされていて逃げる事ができない。

「この状況を見て逃げ出すなんて許しませんわよ！」

ナンダこいつ！変どころじゃないぞ！

「は、はなせえ！こんなあからさまな厄介事何てごめんだ！」

「離しませんわ！」

や、やめる。普通こつという喋り方する女はお嬢様とかじゃないのか
！？

たのむから慎みを持ってください！おねがいます

「おい。お前その女の知り合いか？」

「いや、ちg」そうですわ！「えええええ。」

うそー。君には聞かれてないだろう？

「よし、わかった。知り合いなら容赦はしねえ。」

そついいながらナイフを取り出す男。

もう一人のほうもちやつかりナイフを構えておられます。

「や、やめる！暴力はいけないんだぞ！」

「ああん？お前らが言えた義理か？」

この女一体何やったんだよ！！めんどくせえよ、こええよ。

やっぱり不良は苦手だよ！

そこで俺には魔法があることに気がつく。
なんだ。こいつらを倒すなんて簡単じゃないか！

ここでかつこよく魔法を放つ俺。逃げ出すあいつら。

でも、なんかちがくね？それってヤツ（勇者伊藤）のキャラじゃないか？

俺も魔法に引つ張られてんのかな？気をつけないとヤツみたいになっちゃうな。

でもとりあえずこの状況を打破するには魔法に頼るしかないな。
脅すだけだ脅すだけ。

懐から杖を取り出し魔法陣を描き、氷の鎖を発動。
男どもを縛る。

「うわっ！なんだこれ！？」

「こいつ魔法使えるのかよ！？」

あせってらっしゃる。

「どどどどどどどどど！魔法だぞ！危ないぞ！
に、逃げるなら追わないから降参しろい！」

何だしろいって。

あせりすぎてどもってしまったよ！

「さあ、どつするの？私に勝てるのかしら？」

何だよこの女！？何で勝ち誇ってるの？ねえ、なんで？
あ、ホールド解けてる。

「わ、わかった。何もしねえ。だからこいつを解除してくれ。」

念のためもう一個捕縛魔法を待機させながら、今かけているものを解除した。

じっくりと行動を観察しながら待っていると男どもは素直に引き下がるようだ。

「ふう。このまま去ればいいんだろ？わかってるよ。」

「わかればいいのよ！わかればね！」

もういやこの子。

男どもを見送ってから俺も去ろうとすると再び腰がホールドされる。

「おい。」

もういやだ。

「離しませんわ。」

なんだ？もしかしてこれはフラグがたつたのか！？

まあこの子は性格はちよつと残念そうだが容姿は問題なし。
それどころか綺麗な部類に入るだろう。

少し釣り上がった目に綺麗な鼻筋。

年は同じ位か少し下くらい。性格は残念そうだがな！

大事なことから二回言っちゃったわ！

「大事なカモですもの。大事な恩人ですもの。」

「おい。言い直したところ悪いが遅いからな？絶対的に。」

フラグはフラグでもキャツキャウフフなやつではないみたいだ。まったく何時も何時もちくしょう。

記録12(後書き)

次回で第一章終了予定。

その次から学園編に入る予定です。

感想、誤字、脱字報告などそのほかなんでも待っています。

記録13(前書き)

遅くなつてすみません。

記録13

なんだかんだで先ほどの変な女と歩いている。

どうやら名前はアイリスというらしい、

金髪のロングで天辺にはアホ毛とウサみみのようなりボンが目立っていて、少々勝気な顔をしている。

しかし、なんといいのかどうにもこの子はアホっぽいのだ。

年は2つ下なのだがそれを考慮したとしてもアホっぽい。

それはもう将来悪い男にだまされるか心配してしまうぐらいの爆走っぷりなのだ。

こういった子は今までかかわったことの無いタイプなのだが、なんとも扱いやすいようだ。

一見わがままで短気という風に見えるのだが、下手に出てやるなり、物で釣るなりすれば言うことを聞く、めんどくさいが面白い性格をしているのである。

さきほど魔法を教えてくれとしきりに騒いでいたが、屋台で売っていたサイコロステーキ

らしきものを買ってやると、もきゅもきゅとアホ毛を揺らしながら頬張っておとなしくなった。

ま、食い終わったら騒ぐだろうけどそれまでに離れれば追ってくることも無かるう。

そう思っていた時期が俺にもありました。

こいつを置いていくために態々飯屋に入って料理を注文し、トイレ

に行くといつて席をはずし、こつそり会計を済まし、店を出た時のことだ。

アイリスは運ばれてきた料理に夢中になって居たから、その間に距離を離そうと早足で歩き、

少したつてミーコを探しているといつの間にか後ろにアイリスが居たのである。

お前は忍者かと、ホーミング機能でもついているのかと。

それから2回ほど試みたがアイリスが俺から離れることは無く、

さすがに財布の中身がきつくなってきたのと、このままでは埒が明かないのとで、

仕方なしに何故俺から離れないのか聞いてみようと思う。

こいつの食事が終わればな。

しかし一体どれだけ食うんだこの娘は。

「率直に聞こう。一体お前は何故俺に着いて来るんだ？」

わざわざ距離を離そうとしているのにいつの間にかついてくるし。」

俺の言葉に首をかしげながら器用にアホ毛に不思議な踊りを躍らせている。

MPが吸い取られそうな勢いだ。

「だって、助けてくれましたわよね？」

それに弟子として師匠の後ろについていくのは当たり前ですわ！」

ええええええええ、誰が師匠？俺じゃないよね？違うよね！

だつて了解なんてしてないもの。

「いや、俺は了解してないし、するつもりも無い。大体魔法を習うなら俺じゃなくてもいいだろうに。」

「そうはいつでもお金もないしい、行く当ても……ないし？」

「おいなんで最後は疑問系？それにしてもお前は俺にたかる気か！あと、微妙に喋り方変わってんぞお前。」

すると何か思い出したかのように持っていたポーチを空けて、何か紙とカードらしきものを取り出す。

「これ、お母さんが持っていてきなさつて言ってたような。」

先ほど取り出した紙を受け取り目を通してみると、嫌な汗が出てくる。

紙には入学許可証という文字が書かれており、どうにも見たことのある学校の名前が。

俺の眼に狂いが無ければロンド魔法学園とそこには書かれていた。

「あと、学校で魔法を学んできなさいつて言ってたような気がするわ。」

馬車に乗っていけば着くからつて。でも途中で馬車は壊れるし、護衛の人に追い出されるし。

もう、分けがわからなかったわ。やっと街が見つかったと思ったら、変な男の人達に怒られるし。

でも、ししょーに会えたから良かったですわ！」

やっぱりこの娘、変。

しかも絶対これ馬車襲われてるよ。護衛の人はこの娘を逃がすの大変だっただろうな。

しかし、どうもこの娘子供っぽいな。特に喋り方が。なんていうのか、おぜうさんって感じだな。

「よし。お前が学園に行くのはわかった。だが、俺が師匠になる意味がわからない!」

「でも、ししよーですわよね?」

またもや首をかしげながら、何を当たり前のことをといたような表情で俺を見てくる。

アホ毛はフラフラといや、にゆるにゆると?動いている。

よし、わかった。

こいつは俺が学園に連れて行くしかない。この娘を一人にしておく
と危険である。

どう考えてもこの娘はアホの子でこれは覆しようのない、純然たる
事実だ。

放って置くとどんな目にあうかわからん。

しかもなんだか小動物チックでかわいいし、愛着が湧いてきたし、
行く先も同じだしお供が増えるのも一興。

ペットとして連れて行くのも悪くない。

変な意味じゃなくてね?純真にかわいがる的な。いや、そうじゃな
いって!

性的な意味じゃないって!こっ、愛でるてきな?

何故何を言っても聞こえが悪くなるなんてだ……。

ご、誤解しないですんなよな!俺はロリコンじゃないんだからな!
ほんとだぞ!

しかし、よくお供を拾うな俺は。

「よし、一時的にだが弟子になることを認めよう。
そして学園にも連れて行ってあげるが、道中は俺の言うことをちゃんと聞くこと。」

あと俺のことはお兄様と呼びなさい。」

「わかりましたわ、お兄様！」

ごふっ！？

満面の笑み、それも背景に綺麗な花が咲きそうなほどのものを向けながらのお兄様コール！

アイリスさんまじばねえッス！まじかわいいッス！
おっと鼻から愛情が。

「どうしましたの、お兄様？鼻血が・・・」

心配そうな顔でグイッと俺の顔に近づいて来るがすさまじい破壊力！
周りの視線が痛いぜ。

よく考えたら血もつながつていない娘にお兄様と呼ぶことを強要し、
さらには呼ばれたことに対し興奮し、鼻血を流してニヤケ面で居る
俺はただの変態なのでは？

これはあまりよくないな。うん、よくない。

「お兄様と呼ぶのは禁止します。以後は師匠と呼びなさい。」

威厳を持って先ほどの言動を撤回し、師匠と呼ぶように言っ。

あれ？でも、師匠でも・・・

記録14

アイリスをつれてミーコを探す事約30分やっと見つける事ができた。

町の中央にある噴水のベンチでおいしそうに焼き鳥を食べておられましたよ。

本人曰く迷子になった場合はその場から動かないのが一番らしい。

とにかくミーコにアイリスを紹介して事の顛末を話すと、妹ができたみたいで嬉しいと喜び、旅の同行にも快く了解してくれた。

現在は三人で歩いて宿に向かっている途中だ。

話しをしながらブラブラしていたので空はもう暗くなりかけていた。俺の後ろで二人のみが話に花を咲かせて、その話の中に俺が入り込む好きは1ミリも無く、黙って前を歩く俺。

俺も話混ぜるよな！キリッ。という勇気もなくとことんヘタレだなと考えたが、よくよく考えてみると子供の頃からそんな感じだった事に気がついて諦めの境地に入った。

宿に着き店主にアイリスのための追加料金を払い夕食前に一度部屋に入る。

ミーコとアイリスを座らせ、アイリスにエロエロと聞く。

違った。いろいろと聞く。

ギルドランクを持っているのか、魔法はどこまで使えるのか、戦う事はできるのかいろいろと聞いた。

が、ギルドランクはなし、魔法は使えない、戦えない。

まあ分かってはいたけれど、凄まじいな。

よくこれで盗賊から逃げて、さらにはここまでたどり着くとかいう

幸運を勝ち取れたな。途中で魔物に会わなかったのだろうか？

「とりあえず、ミーコには明日もギルドでお金を稼いでもらっていいかな？」

アイリスは魔法の勉強をしようか。このままでは少し拙いからな。」

「了解、セイメイ。アイリスはちゃんと頑張りなさいよ？」

「はい、お姉様！」

なんとも仲のよろしい事で。本当にうらやましいかぎりですな。

明日からは疲れそうだな、どう考えてもアイリスは頭の足りない娘のようだし、魔法を教えるのは厳しい作業だな。

ミーコには悪いが一人でギルドで金稼ぎをしてもらおう、魔物なんかにそうそう遅れを取る事もないだろうし、まだ安心できるだろう。

「じゃあ明日からの数日の予定はミーコが金稼ぎ、アイリスは勉強で俺がその教師役ってことで決定な。では決まったところで晩飯といきますか。」

「「あーい！」「」

こいつらは一体どれくらい食うというのだ。

全くはかりしれん程の食欲だな、その体型で食べた物は一体どこに消えているというのだ、まったく解せぬ。

食堂まで行き、運ばれてきた料理をにぎやかに話をしながら食べる。ミーコとアイリスのみが。俺は相も変わらず話に加われずご飯を食べるだけ。

もしかしてアイリスの同行を許可したのは間違いだったというのか、

ちくしょう！でもアイリスとミーコは可愛いから許す！
なんか最近俺ぶっ飛んできているな、自重だ自重。

あれから3日。えっ、飛ばすなって？

仕方ないじゃないか延々と勉強のシーンを見るつもりかい？そこは諦めてくれ、頼むから。

アイリスはなかなか優秀な生徒だったようだ。

座学の方はそこそこに覚えが早かった

しかし、若干何かをつかみかけて入るようだが未だ魔力を感じる事はできないようだった。

確か早い人で10日かかると本に書いてあったので、まだかかるだろう。

やはり俺が規格外だったのだろうか？

お金もたまったことで今日から旅に出る事になった。

もちろん行く先はロンド魔法学園。

今は昨日のうちにした旅の準備の最終確認を終え、馬車を取りにきたところだ。

そして気がついた事が一つ。馬車が伊藤君たちに持っていかれていたという事実。仕方なく馬車を新しく用意したが、何という失態。

要らぬ出費がかさんでしまい、予備に持っていたお金がぶっ飛んでしまった。

ぐちぐちと言っているも仕方ないので、さっさとミーコとアイリス、荷物に乗せて町を出た。結構長い時間この町に居たので若干の寂しさを感じつつも、馬車を走らせた。もちろん手綱をにぎっているのは俺だ。いつも通り、いつも通り。

馬車を走らせ、そろそろ日が沈んでしまう前に野営の準備をするかと考えていたところに思わぬ来客があった。

おそらく男だろうが全身を黒い服で身を包み馬車の進行方向にこちらを向き立ち止まっている。

馬車を止め何か理由でもあるのか聞こうと近寄り、顔尾を見た瞬間俺は目を見開いた。本来そこには居ないはずの人間であり、本来この世界ではないようなデザインの服だった。

俺がびっくりしていると声まで同じ物で話しかけて来た。

「おお、大きくなっちゃって。俺が知っているのはまだ小さかったのにな。」

そっくりながら自分の腰あたりに手をやり大きさを示していた。こいつが何を言っているか分からない。

「こうして長い事生きているといろいろ面白い事はあるものだな。どうだ？強くなったのかな、あれから。小さいときに思ったよこいつは才能あるってな。まあ、とうぜんか。」

次の瞬間、いつの間にかソイツが目の前に居て、拳が俺の腹に突き刺さっていた。

「おいおい。だめだめじゃあないか。体術もしっかりと言ったはずだろ。自分に術も掛けていないようだし、体術もだめ、信じられないくらいのだめっぷりだな。」

なんだこいつ。適当に喋りやがって意味分からんし、腹痛え。その場に腹を抱え膝立ちになる俺。

「何だその意味分からんって顔、お前まさか。ちょい頭出せ。」

そついいながら膝をついている俺の頭に手を乗せる。

「おいおい、そういう事かよ。はあ、ありえねえ。」

覇気のない腑抜けた顔しやがって、目も腐つてるときてる。

せつかく試練を開始したみたいだから見に来たというのに……。
あいつめ。

俺はもう帰るぞ、帰るつたら帰るぞ。

お前にはがっかりだ、ここまで上ってきたかつたらもつと努力するんだな。

まあ、お前に言っても仕方のない事だがな。はあ、また人探しかよ。顔がそつくりだからまされたよ、ホント。

あいつめややこしい事しやがって、これは俺に対するサプライズか？
うれしくねえよ！

ああ、そうそう。これは俺からのプレゼントだ、せいぜい頑張れや。

「

ソイツが喋り終えた瞬間意識が落ちそうになる。

最後にソイツの顔を見た時も未だに信じられないかった。

ニヤリとした顔は見た事はなかったが、あの顔はどう見ても……

・

そこで俺の意識は深い闇に飲まれていった。

記録14(後書き)

これで一章終わりかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0909k/>

オレとアイツの人形劇

2010年12月7日09時03分発行